

**Annual Report 2020**

**Laboratory of Regional Design with Ecology**

**Hosei University**

**法政大学エコ地域デザイン研究センター**

**2020 年度報告書**

表紙 夜の日本橋川

裏表紙 日本橋川の乗合クルーズ

写真 Yusuke SHIMADA / apgm\*

## はじめに

新型コロナウイルスが猛威をふるった2020年度は、我々エコ地域デザイン研究センターもその影響に振り回されることとなった。思えば、研究センターのメンバーと実際に対面したのはちょうど1年前の年度末報告会（2020年2月25日）が最後で、以来1年間はオンラインでのみやり取りすることとなった。戸惑うことも多かったオンラインでのコミュニケーションであるが、距離や時間の制約が小さくなることで、デメリットばかりではないことが分かってきた。濃密な議論ができたことも多かったように思う。一方で、フィールド研究をメインとするメンバーには辛い1年間だった。

いまはひたすらコロナ禍の終息を願うばかりであるが、ポストコロナ、ウィズコロナの時代を見据えた時に、エコ地域デザイン研究センターが取り組むべき課題が見えた1年であったように思う。

コロナウィルスの流行は地球規模の環境変化と切り離して考えることは出来ない、地球温暖化による異常気象が頻発化しており、持続可能な環境デザインの必要性はますます高まっている。また、今回のコロナ禍で露見したことのひとつはグローバルサプライチェーンの脆弱性である。マスク、消毒液、トイレットペーパー、生鮮食料品など、日常の細々とした物品までが、世界的なサプライチェーンで生産されており、ちょっとした需要の歪みであつという間に売り場から消えてしまうことに恐怖を覚えた人も多かったのではないだろうか。我々が目下取り組んでいるテリトリーオの概念は、地域に根づいた人とモノの流れを再確認するものであり、これからの環境再構築において重要な視点となることは間違いない。

また、「三密」を避けた新しい行動様式は、都市空間の使い方を大きく変質させることになりそうである。今年度の千代田学事業では「アドホックな賑わい」（暫定的で単一目的指向型

の人の賑わい。例えば皇居ランニング、イベントに関連した動員など）に着目することとしていたが、コロナ禍では全く「賑わい」が忌避される状況となった。そのため、調査の方針を変更し、集まりながら密を避け「安全に賑わう」ための滞留様態を明らかにしていくこととした。具体的には日比谷公園のコロナ禍での利用を状態の把握を行ったが、調査に用いたWi-Fiパケットセンサは都市の外部空間での滞留の様態を細かく捉える際に有用なツールであることが分かった。ウィズコロナの時代では密を避けた交流が必要とされており、外部空間の重要性が再認識されている。「安全に賑わう」ための滞留様態を明らかにしていくことと、それを支える外部空間デザインも我々の研究範疇となってくるだろう。

今年度の研究活動の多くは法政大学江戸東京研究センター（EToS）として連携して行われた。EToSセンター長の高村雅彦先生をはじめ多くの先生方に連携の労をとっていただいた。また、熱心に活動して下さった兼任研究員、兼任研究員の皆様、学生諸君、エコ研事務局の倉本課長・宮崎様・津久井様、その他学内外からサポートして下さった皆様に感謝申し上げたい。特に総合資格学院様の継続的なご支援に心より御礼申し上げます。

コロナの第三波もピークを越え、少しはポジティブなニュースも聞かれるようになった。この1年間の雌伏が来年度以降の飛雄に結びつくよう、今後も皆様のエコ研へのご支援をお願い申し上げます。

2021年2月25日  
法政大学エコ地域デザイン研究センター  
センター長 岩佐明彦



# 1 プロジェクト報告

Project Report

## 府中玉川プロジェクト報告 Report from Fuchu-Tamagawa Project

神谷 博\*  
Hiroshi KAMIYA

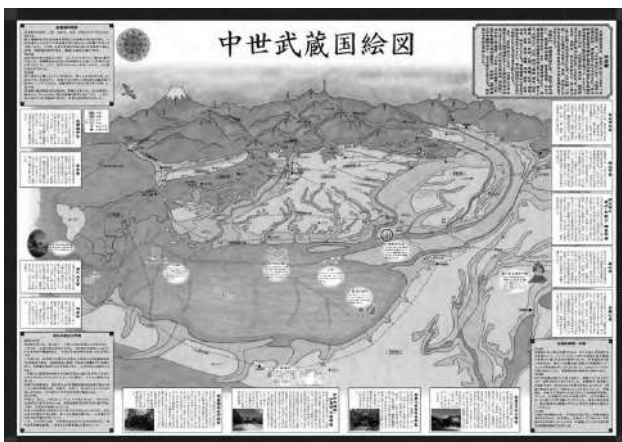
キーワード：水都学、府中、武蔵国、玉川、中世、源流

### はじめに

2019年度までの報告は、水都府中、源流、野川GIの3つのプロジェクトの活動をそれぞれまとめてきたが、2020年度からはこれらをまとめて府中玉川プロジェクトとして報告する。今年度は新型コロナウイルスの影響で、昨年度までのような活動ができず、成果物としては水都府中研究として「中世武蔵国絵図」を発行したにとどまった。源流の小菅村には足を運ぶことを遠慮したこともあり、フィールド活動は実施できなかった。野川GIについては、近場でもありこれまでの活動を動画にまとめて発表する機会を得た。

### 1. 水都府中研究

これまでフィールドワークとして歩く会を14回開催してきた。今年度も三宮大宮氷川神社と二宮小河神社の2回を予定していたが実施できなかった。大國魂神社のくらやみ祭自体も中止になるなど研究活動に大きな影響があった。その中で、昨年度までに内容を煮詰めていた「中世武蔵国絵図」について、7月に発行し500部印刷して配布することができた。



裏面：絵図面

この絵図の趣旨は、鎌倉幕府成立の時期を中心にして中世の武蔵武士の成立と地勢条件との関係を探り上げていくことにあった。江戸の基盤とし

ての中世がどのように江戸に移行していくかを読み解く手がかりとなるべく、これまでの調査を絵図としてまとめた。

### 2. 源流プロジェクト

山梨県小菅村をフィールドとして源流再生の活動を2004年以来続けてきたが、今年度は村の主だった行事も皆中止となり、東京から出向くことも差し控えたため、玉姫神楽の公演などのフィールドの活動はできなかった。3月に予定していた自身の大学退任記念の行事で公表する予定だった畠山重忠をめぐる研究に関するミニシンポも延期となった。その後、11月に記念講演は実施したが、規模を縮小したため歴史のパートは外して別の機会を探ることとした。2021年2月に市民団体による企画で実施する予定であったがこれも延期となった。そのため、今年度は重忠研究の小論を補追する作業を行ってきた。年度明け頃に実施できるよう再度計画を準備中である。

### 3. 野川GIプロジェクト

グリーンインフラについては今年度に関わり大きな動きが出てきた。国土交通省によるグリーンインフラプラットフォームには多くの企業や研究者、市民、自治体が集うようになってきた。国内のGI活動の先駆けとなってきたグリーンインフラ研究会もグリーンインフラネットワークジャパンを立ち上げ、5月に3,000人規模の大きなシンポジウムを計画していたが、コロナでWebミーティング形式に変更となり、11月6～8日に実施された。この中の1コマ90分枠を得て「都市雨水GIを洗い出せ」というテーマで、東京の中で展開されているGI活動を束ねて報告した。野川GIについてもその中で5分枠の動画としてまとめた。また、田中優子先生には江戸のGI、福井恒明先生には景観を担当していただくことができた。

## 気候変動と雨水活用シンポジウム&セミナー 「ドイツ雨水規格から日本の雨水の基準と制度を考える」 開催報告

2020年2月19日(水)、「気候変動と雨水活用シンポジウム&セミナー」が法政大学市ヶ谷校舎ボアソナードタワー26階スカイホールにて開催されました。主催は、法政大学エコ地域デザイン研究センター、共催として日本建築学会あまみず普及小委員会、公益社団法人雨水貯留浸透技術協会、特定非営利活動法人雨水まちづくりサポートの3者が加わりました。他に、国土交通省、公益社団法人空気調和・衛生工学会、公益社団法人日本下水道協会、東京都、横浜市、京都市、世田谷区、武蔵野市、公益財団法人日独協会から後援を頂きました。

「雨水の利用の推進に関する法律」が2014年に施行されて5年が経ちましたが、気候変動に関わる災害はその後激しさを増し、雨水への対策は喫緊の課題となっています。洪水対策等の雨水管理は河川・下水関係の基準や制度が整備されていますが、平水時の流域対策については、必要性は認識されているものの対策が進んでいません。その理由の一つに雨水活用に関わる基準づくりや制度整備の立ち遅れがあると考えられます。そこで、雨水への取り組みが進んでいるドイツの先例に学びつつ、雨水に関する基準や制度について議論を交わしました。参加者は118名で、国内外各地の事例報告をもとに、熱のこもった議論が展開されました。

シンポジウムの成果として、雨水基準制度研究会を立ち上げ、引き続き課題に取り組んで行くことになりました。



## 肱川流域における産業の発展と結びついた空間構造について Territorial Structure of Industries Developed along the Hiji River Basin

樋渡 彩\*<sup>1</sup>、ディエゴ・コサ・フェルナンデス\*<sup>2</sup>、陣内 秀信\*<sup>3</sup>  
Aya HIWATASHI, Diego Cosa Fernandez, Hidenobu JINNAI

キーワード：肱川流域、テリトリーオ、舟運、製紙業、製蠟業、養蚕業、製紙業、木材業

### 1. はじめに

本稿は瀬戸内海に注ぐ愛媛県肱川を軸として、その流域で発展した製紙業、製蠟業、養蚕業と製糸業、木材産業に着目し、地域構造を考察する<sup>注</sup>。

肱川沿いには、「伊予の小京都」と呼ばれる城下町の大洲が位置している。町割りは格子状で、都市の骨格は城下町だったことを今に伝えている。また、肱川には重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建）に指定された卯之町（在郷町）、支流の小田川には内子町（製蠟町として八日市護国）が位置している。このように肱川流域には、歴史的のなかで育まれた都市が存在し、都市開発が進められる昨今において、かつての姿を色濃く残す貴重な場所である。ここでは都市が発展した背景について、流域全体の地域構造を把握する。

### 2. 肱川流域の舟運

肱川流域は舟運も活発に行われていた。川港は肱川とそれに注ぐ小田川に多く分布している。上流の坂石まで港があったという（図1）。これは肱川流域の地形が大きく関係している。河口が狭い谷になっているため、瀬戸内海の風が大洲盆地まで入ってくる。そのため、帆掛け船でも大洲城下町まで簡単に上がることが出来た。潮の干満では、白滝の辺りまで潮が入っていたことから、それよりも上流は、牛や人間の力で引っ張っていた。肱川の舟運の最盛期は、明治末から大正初期の約10年間とされている。始まりは、1869（明治2）年に関所が廃止されてから、旅行や物資の流通制限が解除され、交通輸送が発展し始めた時期を指している。また鉄道が開通する以前までは舟運中心であった。かつて舟運が栄えていたであろう遺構は、「ナゲ」という護岸に築かれた石積みから現在もうかがい知ることができる。

明治初期の輸送の上りでは、コウゾウ皮、ミツマタ、ハゼノミ、青蠟などの原料のほか、砂糖、塩、酒、醤油といった食料品や雑貨、肥料なども運ばれた。コウゾウ皮、ミツマタは、製紙業に欠かせない原料である。ハゼノミと青蠟はろうそくの原料である。木炭は、江戸時代末期からクスギを原木とした木炭の生産が盛んになった。1932（昭和7）年以降は、小田川流域に広がる喜多郡が愛媛県1位の製炭量になった。この辺りは林業も盛んな地域である。

舟運の下りでは、晒蠟（さらしろう）、ムシロ包みのちり紙、半紙、傘紙といった製品である。また、木炭、シュロ縄などが運ばれた。このように上りは原材料、下りは製品という構図を見ることができる。

### 3. 製紙業

大洲和紙は、古文書の「紙漉重宝記」に「万葉の歌人柿本人麻呂により岩見国（島根県）に紙漉きの技が起り、その術たちまちにして伊予の大洲に伝われり」と記されているように歴史が古い。肱川流域の山間部には和紙の原料となるコウゾウが多く自生し、周辺の村々では昔から、農閑期の副業として各農家で紙すきが行われていた。

江戸時代に入ってから、大洲藩の奨励を受け、さらに藩の専売事業となって「大洲和紙」として生産された。大洲藩が楮（こうぞ）役所を五十崎、紙役所を内子に置いて奨励したため、大洲藩の収入源の8割を占めるほど盛んになった。コウゾウの栽培も盛んになり、年貢をコウゾウで納めることも認められていたという。明治の頃には一大産業となっていたことから、コウゾウ皮をほかから移入し、瀬戸内を介して舟運で運ばれていたことから、瀬戸内の舟運の発展と製紙業との関係が見て取れる。

#### 4. 製蠟業

内子における製蠟業の起源は、江戸中期である。大洲藩領で最初に製蠟業を導入したのは五十崎の豪商・綿屋であるという。当初は芸州可部（現在の広島市安佐北区可部）から職人を雇って蠟打ちを始めたが、後に使用人にこれを習わせ、領内の只海・六日市に伝えたとされる。1736年に芳我源六によって製蠟業が始められた。

内子町の重伝建に蠟燭を製造していた建物が立地している。現在、製蠟工程を展示する木蝋資料館は、内子で最大の製蠟業者となった本芳我家から分家した上芳我家住宅である。本芳我家初代の芳我弥三右衛門が確立した製法により、良質の白蠟を大量に生産することができるようになった。明治期には海外にも製品を輸出した。この海外貿易により白蠟の需要が拡大し、内子の白蠟生産は最盛期を迎えた。この例からも、近代の瀬戸内がいかに繁栄していたのかを想像することができる。

#### 5. 養蚕業と製糸業

明治時代、日本の貿易を支え続けたのは生糸だった。大洲でもこの産業に目を付け、大正から昭和初期にかけて黄金期を迎えた。もと大洲藩士の下井小太郎が士族や農民たちの生計を立てるために産業を興したのがきっかけである。1880(明治3)年、この地の産業を考えた結果、養蚕に行きついた。

当時、空洞化していた広大な武家屋敷で桑畑の生産に乗り出した。山梨県から蚕の育て方を学び、養蚕農家の育成や技術向上に取り組んだ。1887年には、愛媛県知事により蚕業が奨励され機運が高

まった。生産された生糸は肱川流域を下り、瀬戸内海を通じて輸送された。この例からも舟運による製品の輸送が保証されていたため、内陸部でも産業が発展し得たことがわかる。

#### 6. 木材産業

木材産業は平安京にさかのぼる。木材産業の最盛期は長浜港が木材の集散地になってからの1910~1920年代である。この時の仕組みは、肱川流域の地の利を生かして、山から木を切り出し、麓の河川まで運び、筏に組んで本流の肱川を通過して河口の長浜まで運んでいたという。丸太材を筏に組む仕組みは、ヴェネツィアに木材を運んでいた仕組みと似た構造である。

肱川流域でも一連の作業をする「筏師」がいた(図1)。筏が肱川の河口まで届く日数は、突合を例にとると、小田川から肱川を経由して長浜まで3日程度だったという。突合からは3、4人で流し、川の流れがゆるやかになる和田からは2人で流した。自転車が普及してからは、筏に自転車を積んで川を下り、復路はそれに乗って帰った。

#### 7. おわりに

これらの産業のほか、農業や商業はもちろん、左官業、酒造業、醸造業、桐下駄製造業、竹材産業、縫製業など様々な産業があった。また、大久喜鉱山から香川県の直島の精錬所に鉱石を運んでいた鉱業などのように瀬戸内とのつながりも深かった。このように肱川流域を軸に地域を捉え直すことで、政治的拠点としての城下町大洲、舟運で栄えた瀬戸内海に面した港町長浜、内陸部の商業都市内子などの拠点がさまざまな産業と結びつき、上流域から下流域の地域構造をつくりあげていたことを立体的に浮かび上がらせることができた。

注 肱川流域の研究は、ディエゴ・コサ・フェルナンデスが法政大学陣内研究室所属時に行っていた研究をベースとしている。2020年2月にコサ・フェルナンデスの案内のもと、樋渡と陣内が現地調査を行った。本稿は、その成果を2021年3月に日本建築学会中国支部で共同発表する「肱川流域における木材産業を支えた地域構造に関する考察——瀬戸内テリトリーオに関する研究 その7」と「肱川流域における産業と結びついた空間構造に関する考察——瀬戸内テリトリーオに関する研究 その8」を加筆・修正したものである。

近畿大学工学部建築学科講師\*1

法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員\*2

法政大学特任教授\*3



図1 肱川流域における筏師と組み場の分布

## 潟プロジェクト Research Project about Lagoons and Ponds in Echigo Plain

福井 恒明\*<sup>1</sup>  
Tsuneaki FUKUI

メンバー：福井恒明、岩佐明彦\*<sup>1</sup>、齋藤浩志郎\*<sup>2</sup>  
キーワード：潟、環境、治水、生業、テリトリー

### 1. はじめに

越後平野では海沿いの砂丘列の背後に低地帯が広がり、潟と呼ばれる湖沼が数多く存在した。明治期の地形図では約 120 の潟を確認することができる。これらの多くは農地拡大のための干拓によって失われ、現在は新潟市内に大小 16 箇所の潟が残っている。新潟市中心部に近い鳥屋野潟、市東部の福島潟、ラムサール条約登録地である佐潟など、越後平野の水循環や環境にとって潟は重要な存在である。

新潟市潟環境研究所（2014 年度～18 年度設置、現在では環境部環境政策課に統合）では、大熊孝・新潟大学名誉教授（河川工学）の指導のもと、潟の環境についての保全計画策定や普及啓発を行ってきた。2017 年度には越後平野全域の潟環境のありかたの構想と表現に関する研究を NPO 法人 GS デザイン会議に委託し、東京大学・早稲田大学・法政大学の合同チームがこれに取り組み、シンポジウム「湿地と共生する都市の未来」（2018 年 3 月）で市民に向けて成果を公表した。

潟に関連する活動は、新潟国際情報大学の研究グループや複数の市民団体が精力的かつ継続的に行っている。これらを受け、新潟市は 2019 年度に「田園地域と市街地の豊かな価値を循環させながら、都市全体が調和ある発展を遂げる『田園型環境都市』を目指し、これを世界に発信するため、『ラムサール条約の湿地自治体認証』に申請し、国内初の候補都市」<sup>1)</sup>となった。

### 2. 潟プロジェクトの経過

法政大学チームは、新潟市からの研究委託終了後もエコ地域デザイン研究センターとして自主的に潟研究を継続している。2019 年度までに佐潟の維持管理を行ってきた赤塚集落の関係者ヒアリング

や郷土史文献調査を実施したほか、第 4 期佐潟周辺自然環境保全計画の策定に向けた住民ワークショップへの参加・協力を行った。

2020 年度は、2017 年度に共同研究を行った早稲田大学チームと合同で現地に入り、治水関係の経緯確認や地域活動の詳細を把握し、今後の展開に向けた議論を行うことを計画していた。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大のため、現地調査は 1 回にとどまった。福島潟・鳥屋野潟・佐潟の現状確認、新設される福島潟水門の景観デザインに関する協議参画、福島潟治水計画の過去資料閲覧と県担当者との意見交換などを行った。

新潟市がラムサール条約の湿地自治体認証申請を行ったことにより、越後平野全体の自然・社会環境の要として潟を捉える視点が重要になってきた。そこで、エコ研のキーワードであるテリトリー概念を導入し、越後平野の自然・社会環境と潟の関係を把握・表現し、潟を中心とする水系の意義や価値を明らかにすることを試みた。

### 3. 西蒲原テリトリー研究

対象範囲は越後平野西部の西蒲原地域とした。新潟県史・新潟市史・巻町史などの自治体史、絵図・地形図や古文書等を収集した。地形・地質図をベースとして、水系、集落、交通、生業の観点から地図を作成した。たとえば越後国絵図（1645）と明治の地形図等を照合し、水系・集落の位置を推定し、GIS 上に集約した。これらの地図を重ね合わせ、江戸初期から中期、江戸後期から明治期の西蒲原地域の成り立ちを表現した（図 1、図 2）。

江戸初期から中期の西蒲原には①山麓沿いの集落、②河川沿いの集落、③旧河道の自然堤防上の集落、④海岸集落の 4 種がみられた。山麓沿いは山からの水源を利用し、居住地として適した山麓に定

住していたが、山裾に沿って流れる矢川では用水利用に関する取り決めにより水資源が分配されていた。河川沿いの集落は断続的な微高地上に立地し、新潟方面との舟運路に沿った物流により集落が発展した。特に舟運路と街道の交差する場所は交通の要衝として大規模な集落を形成した。旧河道の自然堤防上の集落は西川から用水を引くことによる農業と、潟における漁業や狩猟で成立していた。海岸集落は砂丘上に立地し、日本海での漁業と製塩業によって、内陸部とは独立した生業圏を形成していた。

江戸後期から明治期の西蒲原に大きな変化をもたらした要因は砂丘掘削による新川開削である。これにより内陸側の低地帯の排水が進行し、大規模な新田開発が可能になったため、新たに自然堤防上に集落が形成された。一方、新川を通じて海岸集落(浜村)が潟での漁業と潟周辺の新田開発に進出し、生業圏を拡大した。すなわち、排水・治水の進行によって、単に新田開発が進んだのみならず、以前とは別の形で集落と潟の生業圏が形成され、低地帯の重要性が高まっていったことが把握でき

る。

#### 4. 成果と今後の課題

今年度の研究により、西蒲原テリトリーオでは縦横に走る河川と用水、潟(干拓により消失)とその北側に展開する低地が多面的で重要な役割を果たしていたことが明らかになった。また、江戸期に行われた新川開削を初めとする土木工事がテリトリーオの構造に大きな影響をもたらしたことが明らかになった。

今後は、検討範囲を越後平野全体に広げるとともに、支配制度や文化・交流などの面についても視点を展開したい。

#### 参考文献

- 1) 「ラムサール条約の湿地自治体認証について」新潟市ウェブサイト, 2020.3.13

法政大学デザイン工学部教授\*1  
法政大学デザイン工学部4年\*2

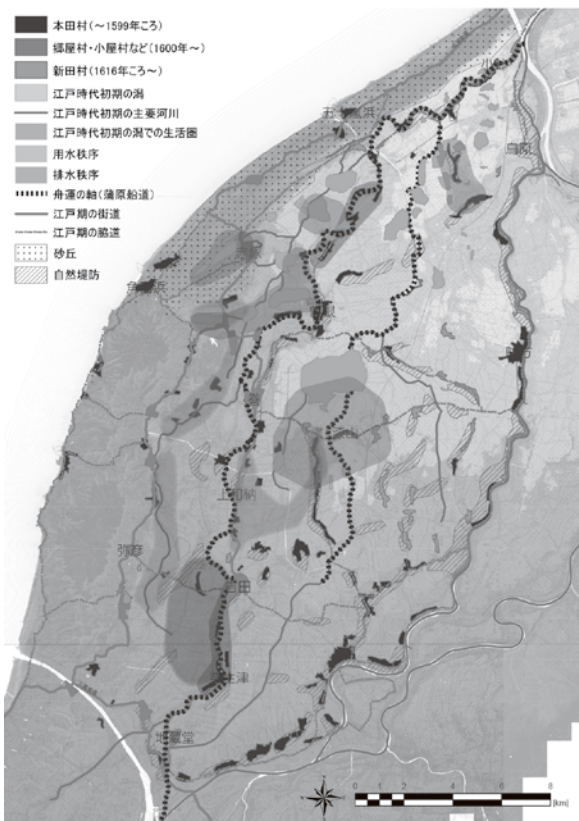


図1 江戸初期から中期の西蒲原における水系・集落・交通網

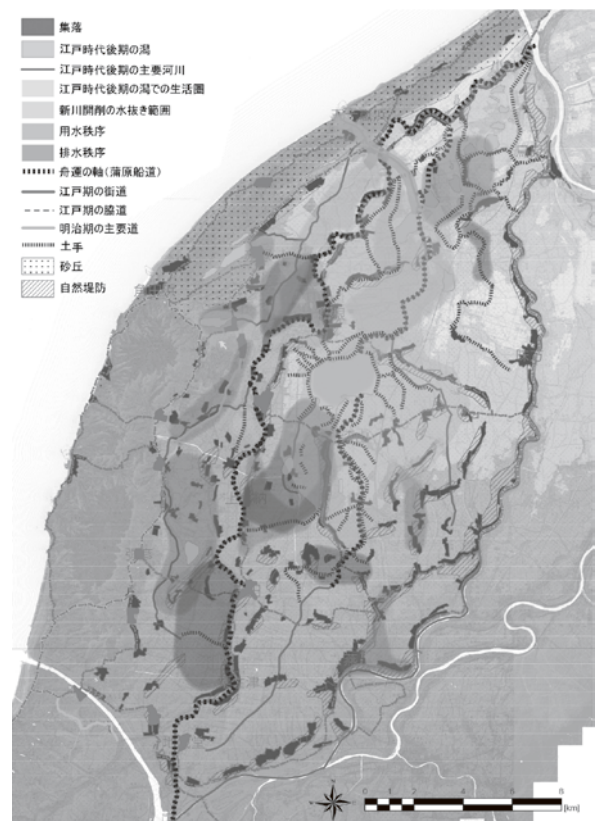


図2 江戸後期から明治の西蒲原における水系・集落・交通網

## 変化の時代に地域とつながり、外濠を使いこなすー外濠市民塾活動報告

### Connection with the Local Community and Using the Space of SOTOBORI in an era of Change

高道 昌志\*<sup>1</sup>  
Masashi TAKAMICHI

メンバー：陣内秀信、福井恒明、高道昌志、小松妙子\*<sup>2</sup>

キーワード：外濠、住民参加、企業市民、地域連携、まちあるき、ワークショップ、外濠再生憲章

#### 1. はじめに

“外濠を知り、そして使いこなす”、これが現在の外濠市民塾が掲げる活動方針である。2019年に発表した「外濠 vision 2036」がその旗印だ<sup>1)</sup>。2020年度はここに描かれた活動イメージを、地域とともに実現していく節目の年となるはずであった。しかし、世界的なパンデミックによって、外濠市民塾もその方向性の軌道修正を余儀なくされた。本稿では、この2020年度に外濠市民塾が経験した変化とそこで構築された新たな体制、そしてそれを踏まえた実現した第11回外濠市民塾の成果について報告したい。

#### 2. コロナ禍での新体制構築

コロナ禍がもたらした最も大きな変化は、幹事会がすべてオンラインとなったことである。3月30日を最初に、月1回のオンライン幹事会が開催されている。ここではまず次のような問題が生じた。それはオンラインへの切り替えが新メンバーの受け入れ時期と重なり、顔合わせがないままに、会の運営を行うことになったことである。オンラインに不慣れなこともあって、意思疎通に難しさを感じる場面も少なからずあったように思う。

一方で、オンライン化が新しい試みを後押しする場面もあった。ひとつは、昨年度から始めた勉強会を継続的に開催できたことである。勉強会は幹事会の冒頭に、メンバーが外濠の近況や歴史について5分程度の発表を行い、知識の共有を図っていく試みである。画面共有機能を使ったコンパクトな発表会は、オンラインとの相性がよく、質の高いやり取りを継続的に行うことができた。

もうひとつこの期間に大きく前進した取り組みとして、公式ウェブサイトの制作が挙げられる。この期間、大きなイベントができなかったこともあ

り、その時間をウェブページの構築に充てることができた。ここでも、オンラインでのデータ共有がページ校正などに有効に活用され、質の高いウェブサイトを立ち上げることが可能となった<sup>2)</sup>。

加えてこの期間は、幹事会にも新しい仲間が加わった。外濠近傍の市谷本村町にオフィスのある(株)電通 tempo より活動に参加したいとの申し出をいただき、今年度から活動をともにしている。このように、コロナ禍によってもたらされた変化の波は、困難を伴いながらも、体制の新陳代謝を促すよい機会となった。そしてその流れは、本体企画の設計にもよい影響を与えることになる。

#### 3. 第11回外濠市民塾の企画検討と実施

当初、5月の連休に開催を予定していた第11回外濠市民塾の延期が決定されたのは3月のことである。そこから、企画の再検討が行われることになった。本章ではそのプロセスについて報告する。

##### (1) 延期の決定と内容の変更

昨年度からの流れを受け、今年度の外濠市民塾では「外濠 vision 2036」に描かれたイメージの実践を目標としていた。当初、予定していた企画は「おぼんカウンター」と名付けた、外濠公園の柵に一時的にひっかけることが出来る木製テーブルを制作し、地域の方々との交流イベントを行うことで、“外濠を使いこなす”ことを提案するものであった。しかし、感染症の拡大によって一般参加者を募集することは難しく、テーブルを活用した飲食も行うことが出来なくなってしまった。最終的には参加者を三輪田学園高校の生徒さんに限定し、飲食を行わないかたちで11月29日に開催する方針となったが、感染症対策を施すなど、これまでにない配慮が求められることになった。

##### (2) 小さなワーキンググループ

難しい条件の中、これを乗り越えていく新しい試みが生まれた。そのひとつに、少人数による自立した活動が積極的に行われたことが挙げられる。これまでの月1回の幹事会での議論に加え、学生メンバーが中心となった小さなグループによる作業が加わり、これが計画全体の質を高めることにつながった。家具の制作についても、作業行程や感染症対策などの細かい点を検討することができた。オンラインを活用した新体制がこうしたチームワークを後押ししたといえる。

### (3) 実現に向けた連携

企画段階で生まれたもうひとつの新たな展開として、地元事業者や他団体との連携が挙げられる。

① Lowp との連携：まず、今回の企画では家具製作のためのスペースが必要になった。この期間、大学が学外者の立ち入りを制限していたため、これに代わる場所の検討が求められたのである。そこで今回は、工作機材を備えたワークスペースを所有している、市谷左内町のコワーキングスペース Lowp にアプローチを試みた。幸いなことに、外濠市民塾の活動に理解をいただき、好条件でこの場所をお借りすることが出来た。こうした連携を通じて、活動が地域へと広がったことは、外濠市民塾にとって大きな前進であったといえる。

② 他団体との交流：もうひとつの連携として、日本大学海洋建築学科の菅原研究室との交流も挙げられる。同研究室では、河川の柵に一人用のバーカウンターを設置し、近隣の商店でテイクアウトした飲み物や食事を楽しむスペースとして開放する「ミズベバー」という企画を進めていた。「おぼんカウンター」と近い取り組みであることから、以前から交流のあった著者が依頼をし、情報共有の機会を得られることになった。9月19日に横浜市黄金町の大岡川沿いで開催された「ミズベバー」のイベントに著者と学生数名がオブザーバーとして参加し、ノウハウの学習と意見交換を行った。こうした関連団体との連携は、今後も積極的に継続していく予定である。

### (4) 「おぼんカウンター」のプレ制作

開催の延期によって、これまで以上に準備の時間をかけられたことも、よい結果につながった。今回は初めて家具製作に挑戦することもあって、事前にプレ制作を行い、その経験を活かしたうえで

本番に挑むという段階的な工程を計画した。開催の1カ月前である11月2日に上記の Lowp でプレ制作を実施し、その経験から当日は学生メンバーが午前中に切り出しと組み立てを行い、午後はペイントだけを参加者に体験してもらうという行程を考案した。また、感染症対策や工具の手配などの細かい点について事前に確認できたことも、当日の運営に大いに役立つことになった

### (5) 本番当日の運営と成果

当日は11月29日13時から予定通りの開催となった。参加者は外濠市民塾メンバーが22人、招待参加として三輪田学園高校から8人が参加した。作業は3グループに分かれ、12台の「おぼんカウンター」にペイントを行い、その後、外濠公園へ移動し、グループ毎に任意の場所を選んで設置を行った。飲食は行わなかったが、見晴らしや気持ちが良い場所をメンバー自らが探すことで、外濠を使いこなすイメージを膨らませることができた。使い方についても、スマホスタンドやベンチの腰掛など自由なアイデアが生まれ、今後の活動に向けて弾みがついたといえよう(図1)。



図1 おぼんカウンターとLowpでの制作の様子

## 4. 今年度の成果と今後の活動方針

以上が今年度の外濠市民塾の活動報告である。先の見通しが立たないなかで、運営に難しさを感じる場面があったものの、結果的には組織の体制を強化し、新たな取り組みを始めるためのよい助走期間となった。こうした成長を踏まえつつ、今後の方向性として、コロナ禍を見据えた社会的意義のある活動も模索していきたい。地域に開かれた場としての外濠の可能性は、今後も益々高まっていくものと考えられる。こうした時勢に敏感に反応しながら、今回制作した家具も有効に活用しつつ、地域と外濠をつなぐ活動を続けていきたい。

注1) 「外濠 vision 2036」とそのイメージについては、2019年度の外濠市民塾の活動報告を参照。

2) ウェブサイトは2021年1月から公開を始めた。

<http://sotobori.ws.hosei.ac.jp/>

東京都立大学都市環境学部都市政策科学科助教\*1  
法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員\*2

## 千代田学事業 -内濠地域におけるアドホックな賑わいの可視化- Chiyodagaku Regional Study-Visualization of ad hoc Liveliness in Uchibori Area-

岩佐 明彦  
Akihiko IWASA

メンバー：岩佐明彦、福井恒明、今井龍一\*1、金子俊之\*2

キーワード：千代田区、内濠地域、アドホックな賑わい、可視化、Wi-Fi パケットセンサ、日比谷公園

### 1. はじめに

千代田学事業による千代田区地域の調査・研究に関しては、ここまで地域史資料の収集とそのアーカイブス化を中心に進めてきた。その中で収集した古写真、絵画、絵はがき等の中には、人の賑わいを捉えたものも多く含まれ、この地域の状況を捉える上では賑わいの把握は欠かせないものとなっている。一方、イベントや出来事によって生じる賑わいは暫定的であり、これまで各種統計ではうまく捉えることが出来なかった現象である。

そこで今年度は「アドホックな賑わい」（暫定的で単一目的指向型の人の賑わい。例えば皇居ランニング、イベントに関連した動員など）に着目し、昼間流入人口が大きく、特にその発現が顕著であると考えられる内濠地域を対象にアドホックな賑わいの可視化と背景要因を明らかにすることを目的に研究を予定していた。しかし、2020年初頭からの新型コロナ肺炎の全世界的な流行により、賑わいを始めとした人々の集合・交流行動は著しく制限されており、イベントは軒並み中止となり、賑わいはむしろ忌避される状況となってしまった。そのため、本研究事業では「賑わい」に着目しながらも、ポストコロナ、ウィズコロナを見据えた公共空間のあり方を視野に入れながら研究をすすめることとなった。

### 2. 研究の目的

本研究では暫定的、単目的志向の人の集まりの様態を「アドホックな賑わい」と定義し、各種ITデバイスの通信量から人の動態を把握する「Wi-Fi パケットセンサ」を用いた分析や移動体からのシークエンス分析などを用いることで、各種統計データでは捉えることができなかった「アドホックな賑わい」の可視化を試み、内濠地域の特性を活か

した都市計画・都市政策の策定に資する資料の提供を行うことを目的とする。

### 3. Wi-Fi パケットセンサによる動態の把握

アドホックな賑わいは暫定的であり、その様態をマクロ的に把握することは従来の観察調査では難しかったが、今回の調査でそれを可能にしたのが Wi-Fi パケットセンサを用いた仕組みである（図1）。携帯型の通信デバイス（スマートフォン端末など）が周辺の通信可能な基地局を探すために定期的に通信を信号を発信している仕組みを利用するもので、Wi-Fi パケットセンサを用いてその通信信号からデバイスの存在を感知する。固有番号（MAC アドレス）を特定する。今日ではほぼすべての人がスマートフォンを所持していることから、Wi-Fi パケットセンサで定点の通過人数を測定できるほか、複数の Wi-Fi パケットセンサを配置し、通信デバイスの固有番号を用いることで二点間もしくは面的な移動の様態を把握することができる。もちろん、Wi-Fi パケットセンサで把握できる情報は個人を特定できるものではなく、統計的に匿名化された情報である。

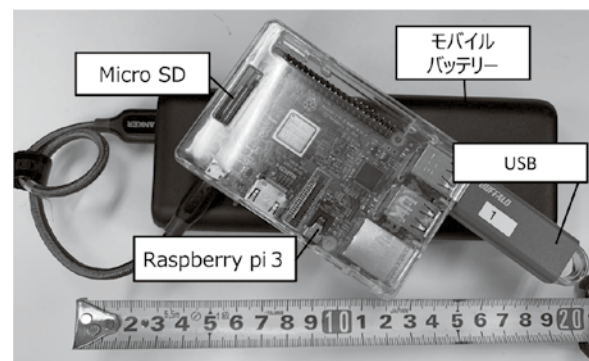


図1 Wi-Fi パケットセンサ

#### 4. 日比谷公園における動態調査

本研究でアドホックな賑わいの把握の対象地としたのは内濠地域に位置する日比谷公園である。日比谷公園は園内で行われるイベントの参加者や日比谷公会堂や音楽堂、図書館などの公園内施設の利用者だけではなく、日常的な通過動線としても活用されている。

調査では公園の入口付近の建物に協力を要請し、固定式の Wi-Fi パケットセンサを入口5箇所に10セット、公園内の9箇所に18セットの可搬式の Wi-Fi パケットセンサを配置し、2020年11月26日(木)の7時30分から19時までまでの公園全体での面的な利用様態の把握を行った。また、入口5箇所では歩行者の入退園を目測でカウントし、流動人数の補正に用いた。(図2)

Wi-Fi パケットセンサを用いた移動の様態では、単純な移動だけでなくその移動に生じた時間から歩行、滞留、滞在など、公園内での様態を推定できることがわかった。また、これらの動きをマッピングした動画を作成し、公園内での賑わいの可視化を行った(図3)。



図2 調査計画

#### 5. ウィズコロナ時代の滞留様態

昨年度以前のプレコロナ時代との比較が不十分なため、今回抽出された特徴がコロナ禍のどのような影響を受けているかは十分には明らかにできなかったが、今回採用した Wi-Fi パケットセンサを用いることで、都市の外部空間での滞留の様態を細かく捉えることができることがわかった。

ウィズコロナの時代では密を避けた交流が必要とされており、外部空間の重要性が再認識されている。特にオフィスビルが建ち並びその集積によって優位性を保ってきた都心部では「集まりなが

ら密を避ける」ことが今後必要とされており、そこの外部空間の役割は大きい。今回は日比谷公園に限定したが、今後は建物周辺の街路空間などにも対象を広げ、より広範な事例を収集することで、「安全に賑わう」ための滞留様態を明らかにしていくことと、それを支える外部空間デザインについて考察を進めていきたい。

#### 6. おわりに

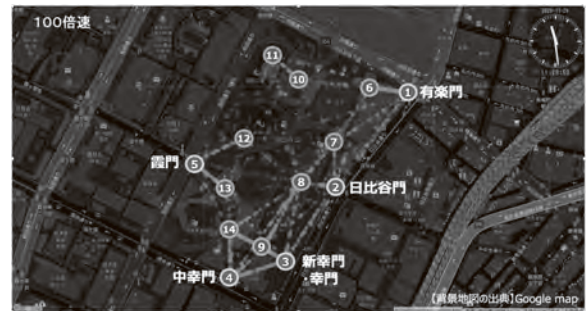


図3 賑わいの可視化

新型コロナ流行のため、当初想定していた賑わいの計測やその見える化を行うことは出来なかったが、研究方針を変更することで、ウィズコロナ時代の賑わいを補足する基礎的な知見を得ることが出来た。内濠地域はオフィスや商業施設など昼間流動人口が多い一方で、日比谷公園など外部空間も多くあり、これらの外部空間をいかに有効に活用していくかが今後の課題となると考えられる。

本研究の詳細については千代田区ウェブサイトに掲載される千代田学事業報告書を参照いただきたい。

調査に際しては今井研究室、福井研究室、岩佐研究室総動員となった。協力いただいた学生各位に感謝申し上げたい。また、コロナ禍の間隙をついた本調査は研究室学生が顔を合わせる事が出来た貴重な機会となった。

法政大学デザイン工学部教授\*1  
法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員\*2

## コモنزの再生 Regeneration of Commons

北山 恒\*  
Koh KITAYAMA

キーワード：コモنز、ヴォイドタイポロジー、線形の都市エレメント、紐マップ

### 「方法論プロジェクト」コモنزの再生

「方法論プロジェクト」では都市内におけるコミュニティユニットの研究を行っている。東京という都市は建物という実体は継続していないが、ヴォイド（空隙や隙間）を見ることで都市構造の変遷が読み取れる。江戸の武家屋敷や寺社の境内など大きな空地が数百年わたり残されている〔面的ヴォイド〕。地形に基づく谷道や尾根道、河川やその暗渠、崖線など線形の空地が都市要素として現れる〔線形ヴォイド〕。粒状の独立建物で埋め尽くされているために 30 年ほどの短い期間で建替えられている〔粒状ヴォイド〕。この暫くヴォイドタイポロジーのなかで最も不安定な〔粒状ヴォイド〕に注目して研究を行ってきた。2017 年には、ヴェネチアビエンナーレ（2010）で展示した東京の都市更新モデルを継続する展覧会とシンポジウムを行った。これは木造密集市街地の街区中央にある未接道宅地という制度上資産価値のない不良敷地を都市更新の資源にしようというもので、継続して研究してきたものである。



続・TOKYO METABOLIZING 展（2017）

2020 年度は、東京の都市構造に特徴的に見られる紐のような〔線形ヴォイド〕によって構造化され

ている生活圏に注目して研究を行うことにした。江戸から続く尾根道や谷道という古道や、小河川とその暗渠の緑道、また寺社地の参道が商店街になっている場合もある。このような〔線形ヴォイド〕がつくる「紐状の都市エレメント」のなかには建物が建替わっていても江戸から続く数百年の時間継続して存在しており、それは人々の記憶の中で共同体の中心として認識されている。



商店街をマッピングした「紐マップ」と  
500m 商圈エリアを示すマップ（製作：DS9Y）

東京の 23 区には 1,771 の商店街があるが、その多くはこの「紐状の都市エレメント」である。その商店街を抱き込む生活圏を構想し、そのなかに都

市におけるコモンズ再生の可能性を検討している。23 区内の商店街の総延長は約 640km あって、商店街の道路を廃道にして歩行者モールとすれば約 3,2 km<sup>2</sup>の歩行者空間が生まれる。これは皇居の面積の 1,5 倍の広さである。商店街は東京の都市内にかなり均等に分布している（紐マップ）のであるが、それは、商店街が日常の買い回りなので商店街を中心とする生活圏が存在していることを示している。商店街の商圈を 500m とすると東京 23 区の全域をほぼカバーする。なので、東京に住む人は誰もいづれかの商店街に帰属しているという感覚を持っているのではないと思う。

毎日都心への往復運動をするという日常が終焉し、近隣で働き生活するという日常があたりまえになるとき、商店街にはその生活を受け入れる空間が用意されるだろう。さらに共有の居場所であると感じられる場、たとえば顔見知りの店主をハブに人々が交歓できる場が生まれれば、そこにコモンズ再生の可能性がある。

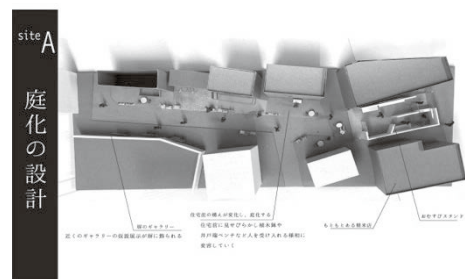
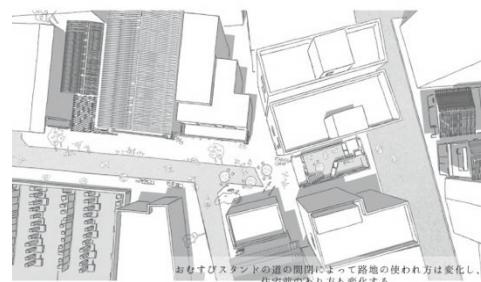


遊戯道路、週末は車の進入を止めて歩行者空間となる  
根津藍染大通り (photo: 栗生はるか)

## 都市デザインスタジオ：東京の商店街研究

2020 年度の大学院の都市デザインスタジオ DS9Y で東京の商店街研究を行った。そこで提案する商店街は歩行者モールとした両側町であり、店前空間には商品がはみ出ることが許され、道には一坪ショップのワゴンやテーブル・イスが置かれ、近くの食堂の天蓋付きのダイニングスペースとなる。空き店舗は「町の道具箱」となり、テンポラリーなイベントスペース、共同キッチンや子ども食堂、障害者施設や高齢者のための公共サービス施設が設けられる。各店舗に本棚を設け、そこに店に関係する本が置いてあるようなりトルライブラリーのネットワークもできる。商店の 2 階にある空き室には学生が勉強するためのラーニングコモンズのラウンジや、もちろんコミュニティオフィスとしてのコ・ワーキングスペースが設けられる。さらに、廃道する道はアスファルトを剥して大きな樹木を植えてはどうだろう。

商店街の近隣に新しい日常生活をする人々が増加すれば、その活動に対応して包容力のある空間に商店街は再編されるだろう。かつて W.ベンヤミンがパッサージュ（パリのガラス屋根付き商店街）を「ユートピア共同体の推進力である」としたように、商店街は東京という都市においてコモンズ再生の推進力となるかもしれない。



路地を「庭化（コモン化）」するスタディ  
(DS9Y 鈴木真優/池内真奈)

法政大学デザイン工学部教授\*



## 2 関連研究

Related Research

# 造船業からみた湊町 - 牛窓を中心とした瀬戸内テリトリーオ -

PORT TOWNS FROM THE PERSPECTIVE OF THE SHIPBUILDING INDUSTRY  
-SETOUCHI TERRITORIO WITH A FOCUS ON USHIMADO-

福地昂弥

Takaya FUKUCHI

主査 高村雅彦 副査 岩佐明彦・樋渡彩

法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士課程

The purpose of this thesis is to clarify the characteristics of port towns in the Seto Inland Sea and their connections from the perspective of the shipbuilding industry. Most port towns have had shipyards. However, there is not much research on the shipyards and regions that made the traditional Japanese style of ship. It is necessary to rediscover the regional value of ships and imagine the future of the Seto Inland Sea.

**Key Words** : *shipbuilding, Seto Inland Sea, Territorio*

## 1. 序章

本論文の目的は、瀬戸内海における港町の特性や、それらのつながりを造船業の観点から明らかにすることである。瀬戸内海は古くから水上交通の大動脈であり、殆どの湊町に造船所が存在していた。しかし伝統的な和船を作っていた造船所や地域についての研究は少ない。

それでも造船地として特に栄えていた場所は、その様相が受け継がれており、開国前の瀬戸内海には数カ所の造船中心地があることが明らかになった。本論で中心的に扱う牛窓をはじめ、大坂や倉橋島がそれにあたる。ただしこれらの造船地は単体で完結しているのではなく、物・人・情報のネットワークを基に成立しているのが大きな特徴である。

これを読み解くために「テリトリーオ」という概念を用いた。テリトリーオとは、都市とその周辺地域が海や陸の交通網で有機的につながり、独自の文化的アイデンティティを共有するような地域を総称したものである。

日本の造船業は19世紀に大きな転換点を迎える。西洋の最新技術と伝統が相まって独自の発展を見せるなど、造船業は活気付いた。造船の発展は新たな都市形態をも生み出した。こうして造船をめぐる多様な景観が生まれ、より特色あるテリトリーオが形成されていたと言える。

1950年代、日本の造船業は世界一まで躍進する一方で、鉄やプラスチック製の船の一般化や木造船需要の低下、陸上交通の発展により造船テリトリーオは衰退する。伝統的な和船を建造できる船大工も減少しており、港町の1つのアイデンティティが失われつつある。

経済成長期以降、人間と海との関係性は一度希薄化した。再び瀬戸内海に目を向ける動きも出てきている。しかし港町同士にかつて存在したような繋がりや強みはない。船をめぐる地域的な価値を再発見し、テリトリーオという観点から瀬戸内海の未来を描く必要性があるのではないだろうか。

## 2. 開国前の湊町と木造船

### (1) 和船とその造船地

瀬戸内海は海が穏やかで温暖な気候である。そのため多くの漁村が成立し、造船が行われてきた。この地域において造船業の初めの転換期が大和朝廷期とされる。それまで近海での漁撈を目的とした船が主だったのに対し、大陸との貿易を行うための大船が必要とされた。また、この時代に湊が整備され航路が確立した。これにより大陸から造船技術が伝達され、主に航路上の湊町で造船がより盛んに行われるようになったと考えられる。

和船の建造は、海岸に造船所を特設して行われたものが多く、記録は残りにくい。そのような中で、古代から造船拠点としての役割が指摘されているのが広島県倉橋島である。その中心地、本浦では昭和後期にかけて造船が行われた。

1635年に徳川幕府によって制定された「大船建造の禁」によって、造船業は制限され大きな打撃を受けた。その国内情勢の中で、最も造船能力を有したのが大坂である。近世は倉橋島、大坂、そして牛窓が瀬戸内海の中心的な造船地であった。

## (2) 船木郷の設置と倉橋島

古代から寄港地となっていた倉橋島では、遣唐使船などの修理が行われていた。その為、この地の船大工は大陸の造船技術を学んでいたと考えられる。また、律令制が成立すると国家は、造船材料を育成させるための村、「船木郷」を諸国に設置した。倉橋島が属する安芸国は船木郷が三つあり、材料の調達が容易であった。こういった要因から倉橋島、特にその中心地である本浦が造船地として発展していった。

本浦は南方に開いた大きな入江を持っている。そのため海が穏やかで造船には非常に適していた。海岸線に垂直な軸線を中心に発達した古代に対して、近世は平行に道を通し、短冊状に割られた敷地が連続する都市構造となる。現在の海岸線は自動車道が整備されているが、かつてここは多数の造船所が並ぶ浜であった。

木造船所には家屋と作業場が一体になっているパターンと分離しているパターンがあるが、本浦の場合後者に当たる。かつては48の造船所があり、一つの造船所に一軒の鍛冶屋がついていたという。また、時折人形芝居が訪れて、浜にある造船所を借りて芝居を行っていたというのだから、非常に賑わっていたことが想像できる。



図1 昭和20年代の本浦

造船の島という特徴を持った倉橋島だが、その原材料は各地から集められている。材木は日向や豊後、山口、伊予といった瀬戸内海を取り巻く中国・四国・九州地方から輸入されていた。船釘やそれをつくるための鉄に関しては大坂、神戸から主に輸入している一方で輸出量も多いことがわかる。恐らく、島の造船に従事していた鍛冶屋は、単に造船に必要な分の釘や錨をつくるのみならず、釘や錨そのものの市場を目標に生産していたことが考えられる。

船自体の取引圏については時代によって様々である。明治期においては、基本的には安芸や伊予、長州地域周辺を中心に、周防や豊前、豊後などからの注文が圧倒的に多く、倉橋島造船業の顧客は瀬戸内海西部の船乗りが主であった。

## (3) 船木郷の設置と倉橋島

近世初期、大坂を西日本支配の拠点とした徳川幕府が掌握しておきたかったものの一つが造船能力である。当時、船は最も主要な兵器でもあった。そのため、大船建造禁で諸国に造船や大型船を所有することを規制した。

かつての大坂は、都市の内部に水路が張り巡らされていた。港湾機能が都市の内部まで広域的に存在しており、水網都市と呼ばれるような様相であったと言える。一極集中的な造船所というよりは、いくつかに別れて小さな造船所が軒を連ねるコミュニティが存在していたと考えられる。造船機能が分散していたことから、その船道具屋や材木店などの関連業もまた、都市内の水際空間に分散していた。特徴的なのが、船を解体しそこから得られる古い木の販売を行う「解船屋」の存在である。解船屋は大坂以外の地域ではほぼ見られず、いかに船の新造から解体までの過程が大坂に集中していたかがわかる。

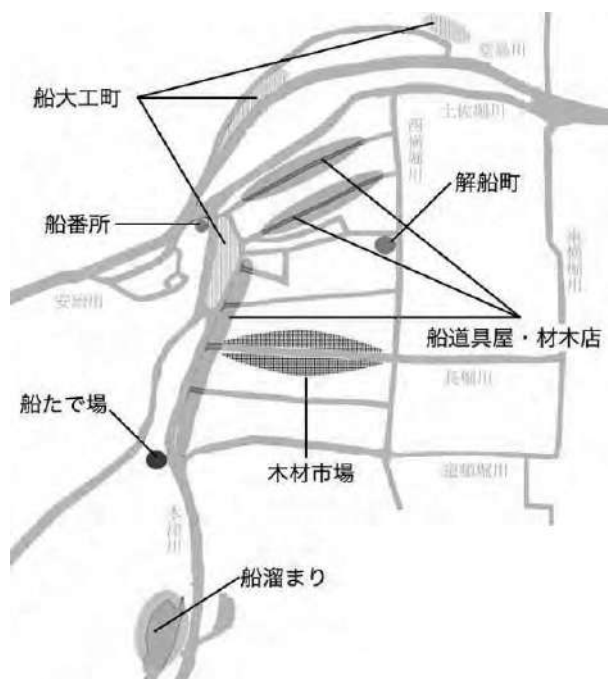


図2 江戸期大坂の造船関連業者の分布

造船に必要な技術労働力と資材の供給体制が整えられていたことが、大坂が日本最大の造船拠点となることを可能にしたのである。

## 3. 造船の近代化による新しい都市形態

本章では近代以降の造船業を中心に、造船所の立地背景や特徴について言及する。黒船来航から現在までの造船状況を4つの時代に区分し、その変遷を概観する。そしてその時代変遷の中でどのようなタイプの造船所や地域が新たに形成されたのか、また姿を消していったのかを明らかにし、類型化を行なった。次節以降でそれらの瀬戸内海における立地や具体例を見ていく。

## 2 関連研究 Related Research

### (1) 年代区分

#### a) Phase1 [1853~1895] 西欧式技術の流入

近代初期は、手探りながら徐々に船の変化に対応していく時代であったと考えられる。特に広島県島嶼部でそのような動きが多く見られ、島嶼部を支配した水軍の高度な造船技術が、近世の規制で押さえつけられながらも、健在であったことを示しているとも言える。とはいえ、近代造船の初期の中心地は長崎や石川島、横須賀であった。しかし神戸小野浜鉄工所から呉へ海軍施設が移転すると、瀬戸内地域の造船業の本格的な近代化が始まる。

#### b) Phase2 [1896~1945] 伝統と西欧式の融合

呉海軍造船所の創設や、造船奨励法発布により瀬戸内海にも造船ブームが訪れる。軍艦建造のための大型の船台やドックが各地に建設されるようになる。また、需要が増えたのは大型船だけではない。阪神工業地帯を中心に石炭の需要が高まり、流通が活発化していた。そして港湾内で荷の積み替えを行うための小型船の需要が増えており、そのような船を扱う造船所も数を増やしていた。

しかし戦時体制に入ると、職人の多くは軍の造船所に徴収され、地方の造船所は痛手を受ける。木造船業界全体として技術継承の面でも大きな影響を受けた。

#### c) Phase3 [1946~1988] 経済成長期の盛衰

二次大戦終戦後、5年程で造船業は好況となった。呉周辺地域、芸予諸島、香川県臨海工業地帯を中心に大型造船所が林立する。こういった造船所は数多くの下請関連工場群を保有するだけでなく、所内に多くの常勤従業員の本工と臨時工、請負工として社外工が雇われている。さらに下請関連工場群の従業員を考えると、造船所立地地域への社会・経済的影響は多大である事がわかる。

#### d) Phase4 [1989~] 中手造船所の時代

政府指導による構造調整の結果、建造能力は約50%削減され、大手造船会社は建造能力を削減した。一方、中手造船所にとって造船業は生業であり、地域の主要な地場産業であるため、各社は能力維持に努めた。今治造船や常石造船を中心とした中手は国内企業の合併や海外での生産設備新設を行って建造能力を拡張した。これによって造船業の主役に踊り出るようになった。

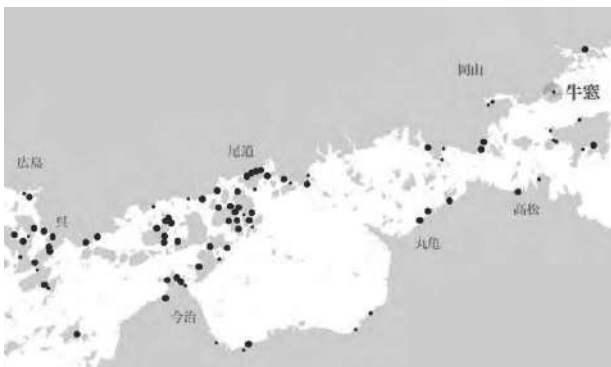


図3 現在の造船所の分布

### (2) 立地類型

#### a) 漁村型

小規模な漁村に造船所が1, 2箇所ほど立地している形式。木造船を作っていた時代、船は現在主流となったFRP船に比べ寿命も短く、かつメンテナンスが必要であった。そのためかつてはどの漁村にも必ずと言っていいほど造船所は存在し、集落の構成要素の一つであったと言える。

事例として鞆をあげる。近世港町4要素（波止、常夜灯、雁木、船たて場）が現存することで有名であるが、特に船たて場（船の底に着く虫や貝、海藻などを焼など、主に船のメンテナンスを行う）の存在は貴重である。

昭和初期には造船所と思われる施設が5軒ほど確認でき、当時主流であった機帆船などに対応していたことがうかがえる。現在もその地には造船所があり、かつての様相を今に伝えている。

#### b) 小型造船所集積型

集落に造船所が集積している形式。造船関連産業との密接な連携も存在し、地域全体で船を作っていたとも言える。近世の事例では本浦や大坂、また次章で扱う牛窓がこの形式にあたるが、ここでは近代に入り一気に造船能力を開花させた大崎上島の木江を扱う。



図4 木江の造船の様子

豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に、木江で軍船が造られたという伝説があり、造船は行われていたと考えられるが、同時代の牛窓や本浦に比べれば規模は小さかったと考えられる。しかし大崎上島には、沖浦や明石といった船釘などの造船材生産で近世より栄えた湊があった。こうした要因が大崎島造船業の急発展を後押しした。

大正時代になると阪神工業地帯の活況により、筑豊炭田の石炭輸送のための石炭船の需要が大いに増した。それに対する供給が追いつかず、島内のあらゆる場所に造船所ができた。職人も家大工が船大工に転身したり船員が造船所に働きに来たり、また他に地域からの大工も大勢集まった。

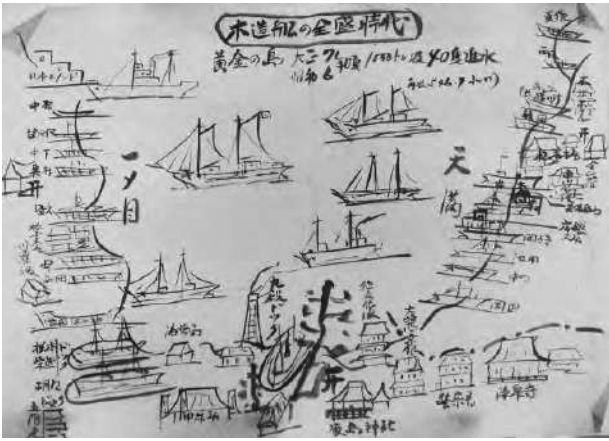


図5 木江港を描いた絵図  
(広島県立文書館)

木江ではこの時期に 20 もの新造船所が設立し、1 年間に 1000t 級の船が 40 艘も建造されていたという。こうして木江を中心に造船で栄えた大崎上島は「黄金の島」と呼ばれるようになった。

#### c) 都市港湾型

近代以降に主要な、または地方都市として発展し工業が栄えた港湾に立地する形式。特に鉄道が開通すると、それらとの結びつきを強め、生産能力を高めていった。

神戸の場合、開港した事で近代的な造船所を建設する事になったが、市民との摩擦が恐れられ人口希薄な場所が選ばれた。1868 年にエドワード・チャールズ・キルビーが小野浜鉄工所を設立し、日本初の鉄製汽船および初の鉄製軍艦「大和」(初代)を受注している。その後海軍に買収され、設備を呉に移し閉鎖したが、エドワード・ハズレット・ハンターの設立した大阪鉄工所と並び、日本近代造船の黎明期に大きな役割を果たしたと言える。



図6 小野浜鉄工所配置図

#### d) 軍港型

日本海軍の根拠地であった鎮守府に軍の造船所として建設された形式、立地場所としては元々寒村であった場所が選ばれる場合が多いが、造船所で働く人員が各地から集められ、また産業が発達することから、一時期に人口が一気に増加して街が形成される。

瀬戸内海における軍港型の事例は呉である。呉は山に囲まれ前方には島があり波は穏やか、かつ水深が 10 メートルあるということから天然の良港であった。それに目をつけた軍は、神戸から設備を移し鎮守府および海軍造船所を建設した。

明治期には呉を含めた 4 つのまちに鎮守府が置かれた。それらに共通して言えることであるが、鎮守府が置かれる以前は決して大きなまちではなかった。むしろ寒村といっても良い。呉の場合、鎮守府開庁前に 15,000 人程だった人口が 40 年で約 10 倍になっており、戦前の最盛期には 40 万人を超えている。

海軍造船所の建設は、富国強兵を掲げる国家の主要プロジェクトのため多額の資金が投じられる。周辺各地から職工が集められ、造船所だけでなく街が急激な発展を遂げた。

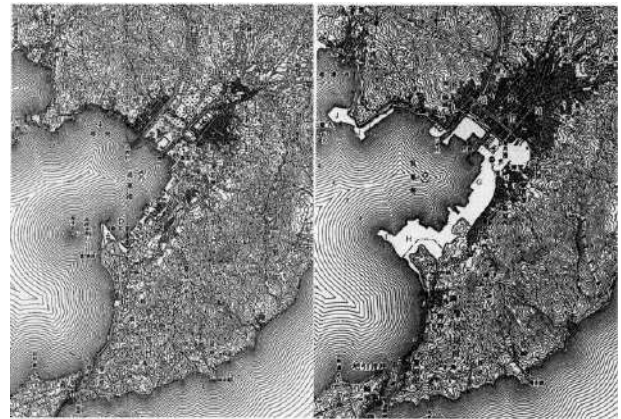


図7 1899年(左)と1925年(右)の呉

#### e) 独立工場型

船が大型化し都市が拡大してくると、都市部での造船所用地の確保が困難になり、造船会社は地方に生産拠点を移すようになる。因島や相生といった地域では、下請関連工場群の拡大が著しい。戦時体制になると従業員も大幅に増加し、造船社宅・寮が数多く建設された。それでも足りず、因島などでは民家を間借りさせた。こうして造船所を中心とした新集落がつけられた。

現在日本の造船業を引っ張っているのは今治を拠点とする今治造船であるが、1980 年代まではローカルな造船所であった。

20 世紀前期、前身である檜垣造船所が設立し、太平洋戦争開戦直前には 6 社が合併して今治造船有限会社を設立した。戦後の混乱で、大手造船所を中心とした造船ブームに乗り遅れるが、徐々に立て直す。丸亀や西条に工場を設立するなど、積極的な設備投資が進められ、独立工場型へと移行していく。これが功を奏し、オイルショックに始まる造船不況で、1976 年から 1980 年の間に中手 47 社が倒産した中で今治造船は中手造船所を次々と系列化し、建造量で大手造船会社を一気に抜いていった。

4. 造船業からみた牛窓のテリトリー

(1) 基盤形成

牛窓は岡山県南部に位置する湊町である。前方に島、背後に丘陵があり、海が穏やかであった。さらにリアス式海岸で急激に水深が深くなっており、造船地としてはこの上ない自然条件である。

中世においては朝鮮半島や大陸との貿易の湊として、近世には朝鮮通信使の接待の為の湊として機能しており、牛窓の名は中央政府にも広く知られていた。近世、町内には在番所や官舎が設置され、官による直接的な支配があったと言える。造船が規制されていた近世期において、官の監視下に入っていることで、造船業は繁栄を続けることができたとも考えられる。

恵まれた自然環境、豊富な文化財、造船を中心とした活気ある産業がつくり出す風景は、まさに文化的景観と言える。



図8 近代初期牛窓のイメージ図

a) 古代の牛窓

古代の牛窓の様相を今に伝えるものの一つに古墳がある。最も古い牛窓天神山古墳に用いられている石材は香川県屋島から搬入されていた為、このころから高度な造船能力があったと推測できる。その後も作られ続けた古墳群は現在の街の大まかな領域を描いている。



図9 牛窓の古墳群

牛窓には大型河川がなく、海岸線に垂直な都市軸は存在しない。古代の街の軸を決定したのは参道である。牛窓天神山神社や本蓮寺などといった神域から海へと伸びる参道を軸として漁村ができていったと考えられる。

中世まで船大工は点在して船作りをしていたと考えられる。近世初期、京都の豪商が川を開削し物資を運ぶ際、牛窓から船大工が呼び寄せられたという記録があり、その名が中世末期には広く知られていたことがうかがえる。

b) 近世の街並整備

牛窓の街が大きく変化したのは朝鮮通信使の寄港地に指定された江戸時代前期である。通信使の受け入れ態勢を整えるため幕府は寄港地に対して街並みの整備を指示した。通信士が上陸する下行場から御茶屋にかけて、道は掃き清められ、沿道にある町屋は戸戸を閉めて幕や簾で覆い提燈がかけられた。

建築だけでなく湊の施設の整備が進められ、灯籠堂や雁木、沖には波止と、湊に必要な要素が次々と築かれた。

c) 船大工のまち

湊に重要な建築物が作られていく一方、造船所は街の外へと移転した。理由としては、景観や安全性の問題、また造船拠点を集約化する狙いがあったと考えられる。移転先には元から牛窓に居住していた船大工に加えて、瀬戸内の各地から船大工が集められた。

船大工の家屋は道の山側に一列に造られ、それぞれの地先の浜が主な作業場所となる。間口は2間から5間半ほどで、家屋は主に一列三室型平面で土間のスペースが大きく確保されている。こうすることで、土間を作業スペースとしても利用できるような工夫がなされている。

現在は道が整備され、山側と海側の所有者が異なる場合が多いが、当時作られた短冊状の地割は現代にもよく受け継がれている。ここには地元民に加え、瀬戸内全域から技術者が集まり最盛期には500人以上の造船関係者がいたと考えられる。

このように、現在見られる牛窓の都市空間の基盤は、藩の権力によって近世初期に形作られた。朝鮮通信使をもてなす外交エリアを中心として、商業、漁業、そして新しく造られた造船エリアが位置するという領域性が生まれたと言える。



図10 4つのエリアによる都市構成

## (2) 民の時代

### a) 商家

朝鮮通信士の迎接の際、牛窓の商人たちは自らの屋敷を藩に提供していた。商家は、特定の品目ではなく多様な商品を扱っており、総合商社的な機能を有していた。

こうして藩との関係を深める中で力を蓄えていった民間の商業資本が、江戸後期に通信使来航がなくなった後の街を支えていった。外交都市としての意味合いを失っていくと、人々の関心は湊町本来の商業活動の方へ移る。特に有力商家が木材を集中的に取り扱うようになり、材木業が飛躍的に伸びていった。このことは造船業の発展を大きく後押しした。

このような官に替わって民がまちのイニシアチブをとるようになり牛窓の景観は大きく変貌していった。

### b) 東服部家

近代、岡山藩の支配が消滅すると、さらに民間主導の新しい発展を遂げる。現代の牛窓の都市景観を形づくる建築物の大半が明治期から大正期に建てられている。道筋に面して長屋門を建て、規模も江戸期に比べればはるかに増している。

明治前期の地租改正事業後に商家は土地集積を開始している。かつては武士しか許されなかったスタイルを商家が踏襲し、牛窓の都市組織を変化させていったのだ。その中でも、ともに材木業を営んでいた岡家と東服部家はかなりの土地を取得している。造船用の良質な木材流通のノウハウを活かし、解禁された大型船建造に進出していったのである。

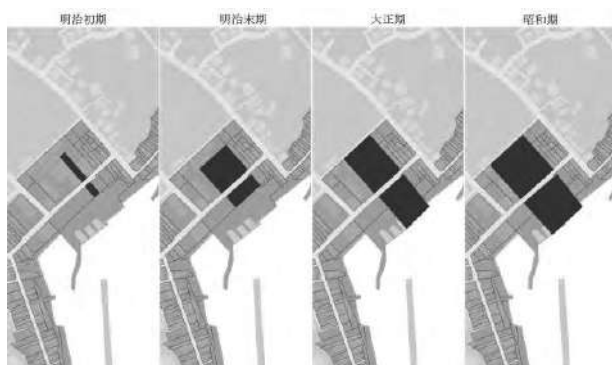


図 1 1 東服部家の土地集積過程

東服部家は、当初は間口 5 間の小さな敷地であったが、明治末期に隣地を買収し屋敷を建て直す。その後も背後の水田を宅地合成するなどして土地を広げた。そしてその過程で得た地先の浜を整備して造船所が建設された。

牛窓は造船所だけではなく製材を行う木挽や釘を作る鍛冶屋など造船関連業者によるネットワークで非常に活気ある街であった。文化・文政期には 150 人の船大工と、300 人の木挽がいたとされている。船大工は棟梁・浜棟梁・船大工・見習いという風に分かれている。一人前として認められるまでに 5 年以上はかかった。

### c) 牛窓の近代

明治時代以降には藩による保護も完全になくなり、さらに機帆船や西洋帆船が登場したことで、寄港地としての牛窓の地位は低下した。しかし時代の要請に応じた船を作り続けていったことで造船地として生き延びていく。明治期には大阪築港工事などにより阪神地域に大量の船の需要が生まれ、牛窓はそれに応えていった。

1907 年に岡材木店、1917 年には東服部合資会社が造船部を設立して牛窓造船界を牽引した。また牛窓では船舶用エンジンの製造が盛んになり、それが造船業の発展を後押ししたとも言える。こういった技術革新は牛窓の木造船業に動力化を促した。機帆船や船、軍用船など様々な船が造られた。

昭和前期、戦時体制に入っていくと船舶の増強の必要性が高まっていった。戦時標準船と呼ばれる船舶増産を実現するための船が、国策により造られるようになる。建造時間の短縮と資材調達の便を図られた一方で、簡易化された構造のため性能に欠ける。牛窓では、国策に従い戦時標準船を量産するために、東町の業者を中心とする企業合同が行われた。



図 1 2 戦前の東町の造船所

戦後再び数十軒の小型造船所が独立し、以前の体制に戻った。しかし、木造船から鋼船、FRP 船へと需要が変化していき、木造船の需要は大きく減少していった。個人経営の小型造船所は木造船の技術を駆使して、FRP 船の型を作ったり内装を請け負ったりしていたが、そういったものも FRP に取って代わられるようになる。

また木造船の耐用年数が 10 年程度であったのに対し、FRP 船は 30 年以上ということ更新需要が低下していく。さらに流通の主役が水上交通から陸上交通に大幅にシフトしていったことから、全国的にも小型造船所の経営は非常に厳しいものになっていき、その数は大きく減少していくことになる。それでも木造船は少ないながらも残っているため、小型造船所は各地に点在している。

このように牛窓は、時代ごとの造船と結びついたレイヤーの重なりの上に形成されている。

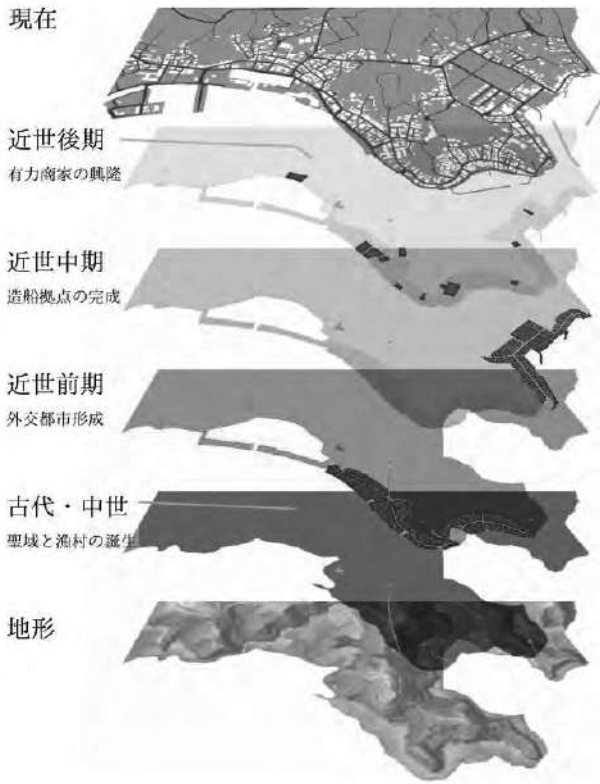


図 13 牛窓を形成するレイヤー

(3) 造船業と結びついたテリトリーオ

歴史的に都市は単体で成立し発展するのではなく、その後背地との関係の中で繁栄してきた場合が多い。都市とその周辺地域が海や陸の交通網で有機的につながり、独自の文化的アイデンティティを共有していたのである。このような地域、「テリトリーオ」が瀬戸内海では海を媒介として古くから成立していた。

本節では牛窓を中心に造船業と結びついた瀬戸内のテリトリーオに注目し、近現代それが失われて以降の展開について言及する。

a) 流通拠点の誕生

牛窓が、造船に関する瀬戸内のテリトリーオにおいて重要な役割を担うようになった要因は、特に造船材料の流通拠点になったことである。江戸時代初期に牛窓は朝鮮通信使を受け入れるため、様々な建築や港湾施設が築かれたことは前章で述べた。1695年には一文字波止と呼ばれる堤防が築かれ、湊はより安全になった。そして波止のさらに陸側に堤土手が築かれており、内側は貯木場として利用された。

この規模の貯木場は当時の瀬戸内海でも珍しいと考えられ、この施設が完成したことで木材流通が活発になり、造船業の発展に寄与したのである。かつてはここから台車に乗せて造船所まで運んでいたという。現在は埋め立てなどで規模は縮小し貯木場の機能はないが、その名残は見られ、船だまりとなっている。



図 14 明治末期頃の貯木場

b) 木材流通

牛窓での木材の流通は九州・四国・近畿地方と、広範囲に及んでいる。その中でも九州南部の日向地域との結びつきが強い。材料を通じた日向との繋がり近世初期から始まり、中期以降により密接になっていったという。前節で述べた牛窓の有力商家である東服部家の記録では、日向国の美々津や大堂津との緊密な取引の様子がうかがえる。

これは近代に入ってさらに拡大発展している。明治期になると、旧藩営事業を再編した「飢肥商社」が飢肥杉の実権を握っていった。商家との結びつきが強く、東服部家のような商家から資金提供を受け、それを材木で返還するという関係性を築いていた。

大正期の日向から牛窓への航路記録では日向の美々津・細島港から牛窓港まで20日から1ヶ月ほどの期間を要している。材木商は多くの場合、広島の子母や尾道などの主要港、近代ならば大崎上島の木江などに寄港して取引を行い牛窓に至るといった航路をとっていたと考えられる。

船体を使う木材は、その部材に適した樹種が調達されていた。船を構成する上で重要な外板部には、ほとんどの場合杉が用いられる。長くて太い、脂分が多いものが好まれた。そういった杉は建築材としては向かず、造船材として販売した方が高く取引できたため、船大工に直接販売することもあった。

このような木造船の構造の主要な部分に用いられる木材は「弁甲材」と呼ばれており、この弁甲材として重宝されていたのが飢肥地域産の「飢肥杉」である。伐採された飢肥杉は美々津や油津などに運ばれ全国に供給された。

主要部ではない材に関しては、多くの場合近隣の山林から供給された。船の床などに使われる松材などがそれであり、牛窓の場合は岡山県の新見、勝山、津山地域などから舟運を用いて運び込まれた。造船材は、部材によって適した樹種や木の質や形状などが様々であるので、造船に精通している木材商が見定め供給していた。

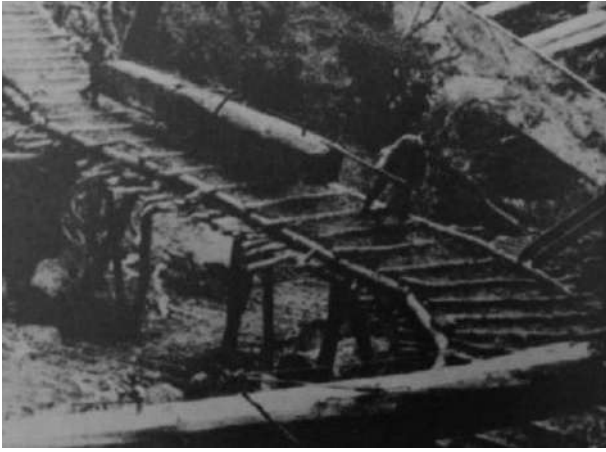


図 15 弁甲材の搬出

### c) マキハダ・船釘

木造船を建造する上で重要な材の 1 つに、板のつなぎ目を補填し水の侵入を防ぐ「マキハダ」がある。大崎上島の明石が主な産地で、江戸時代から生産されていた。原料であるヒノキは、奈良県桜井市を中心に、岐阜県神淵、熊本県阿蘇、愛媛県大洲、岡山県勝山からも調達していた。完成した製品はマキハダ専用船で、牛窓はもちろん阪神・四国・九州の瀬戸内海一円や、朝鮮半島までも出荷されていた。

マキハダとともに木造船に欠かせないのが船釘である。船釘は大崎上島の沖浦や鞆の浦が主な産地で、これらの地域で瀬戸内海のほとんどのシェアを占めていた。

大崎上島にはマキハダや船釘を明石港に積んで瀬戸内の各造船所に流通させていた。このように、弁甲材以外についても藩政時代に形成された経済圏があった。

### d) 人の流れ

牛窓には木を伐採し運搬を行うなど、林業に従事する「杣」が多く存在していたと記されている。杣とは木を伐採する、運搬を行うなど林業に従事する人を指す。近世前期には 600 人もの杣が四国や九州へ、特に大隅や薩摩、日向といった地域に向かっている。現在の安芸群田野町には「牛窓」姓の人々が多く存在し、牛窓杣の末裔と推測されている。

材木取引の特徴の 1 つに「山買い」がある。これは切り出された木材を買うだけでなく、山自体を購入するということだ。これにより木材の安定的な供給や、価格変動に応じて出荷量を調整できるなど有利な商いが可能であった。

また産地と消費地が遠距離であるため、情報収集が欠かせなかった。杣は現地の材木商との取引などの交流から、材木関係の情報を得ることも重要な仕事であった。そのため造船所に入入りし船大工に情報提供することも珍しくなかったという。

牛窓を含む造船地は、単体で完結しているのではなく、物・人・情報のネットワークを基に成立していた。



図 16 造船のテリトリーオのイメージ

## 5. 結章

牛窓は戦後からバブル期にかけて観光業へと舵が切られた。同時期に同様なコンセプトで観光地化を目指す街が増えたが、多くの場合陸から見た視点であり、そこに海からの考え方はない。これは風景や空間の画一化・貧困化を招いたと言えるだろう。舟運に変わって陸上交通がメインとなったことで、海は活動の場ではなく見るだけのものとなった。これは地域間交流を希薄にし、海を媒介とした瀬戸内としての地域の一体感も失われていった。

だからこそ海からの視点で、それぞれの港町の文化的アイデンティティ、そしてそれを共有する地域としてのテリトリーオが重要となる。造船業は瀬戸内テリトリーオを構成する 1 要素として今後も注目すべき対象と思われる。

謝辞：論文を執筆するにあたり、2 年間指導していただいた高村先生をはじめ、多くの助言をくださった樋渡先生、岩佐先生、そして陣内先生に深く感謝申し上げます。また貴重なお話を聞かせていただいた各造船所の皆様、私を支えて頂いた方々、本当にありがとうございます。

### 参考文献

- 1) 陣内秀信, 高村雅彦: 水都学Ⅲ特集東京水都圏 水のテリトリーオ, 法政大学出版局, 2012
- 2) 陣内秀信, 岡本哲志: 水辺から都市を読む 舟運で栄えた港町, 法政大学出版局, 2002
- 3) 宮本常一: 私の日本地図 4, 未来社, 1968
- 4) 斎藤善之: 新しい近世史 (3) 市場と民間社会, 新人物往来社, 1996
- 5) 牛窓町史編纂委員会: 牛窓町史/通史編, 牛窓町, 2001
- 6) 刈屋栄昌: 牛窓風土物語 続, 牛窓郷土研究会, 1973
- 7) 倉橋町: 倉橋町史 / 海と人々の暮らし, 倉橋町, 2000
- 8) 福本清: 図説大崎島造船史, 木江地区造船海運進行協議会, 1988
- 9) 谷沢明: 瀬戸内の町並み-港町形成の研究, 未来社, 1991
- 10) 濱田武士: 伝統的和船の経済-地域漁業を支えた「技」と「商」の歴史的考察-, 農林統計出版, 2010



### **3 今後の活動に向けて**

**A Vision for the Next**

## 2019 年度活動報告会 開催概要

日時：2020 年 2 月 25 日（火） 13:00-17:30

会場：法政大学市ヶ谷田町校舎 5F マルチメディアホール

主催：法政大学エコ地域デザイン研究センター

後援：総合資格学院

### 開催概要

はじめに 福井恒明（法政大学デザイン工学部建築学科 教授 / センター長）

### 第一部

『テリトリーオ研究の展開——ヴェネツィアから瀬戸内へ』

樋渡 彩（近畿大学工学部建築学科 講師 / 客員研究員）

『造船業からみた湊町 —牛窓を中心とした瀬戸内テリトリーオ—』

福地昂弥（法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻 修士 2 年）

コメント：陣内秀信（法政大学 特任教授）

『フィールドサイエンティスト廣井敏男の環境思想と実践—狭山丘陵の里山保全運動の中心的存在—』

清水淳（北川かっぱの会代表 / 客員研究員）

コメント：小島聡（法政大学人間環境学部人間環境学科 教授）

### 第二部

パネルディスカッション 『テリトリーオの理論と実践の展開』

司会進行：福井恒明 / 岩佐明彦（法政大学デザイン工学部建築学科教授 / 副センター長）

- テリトリーオ概念の概要 福井恒明
- 低平地テリトリーオ（越後平野） 福井恒明+岩佐明彦
- 瀬戸内テリトリーオ 樋渡彩
- 北関東地域：桐生地域で行った撚糸水車研究 堀尾作人（パシフィックコンサルタンツ株）
- 天竜川のテリトリーオ（南信州～遠州）を探る 石神隆（法政大学 名誉教授）
- 斐伊川、島根半島地域の水辺とまち、浦、社  
高見公雄（法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 教授）
- 浜・離島テリトリーオ（新島）  
金谷匡高（法政大学デザイン工学部建築学科 教務助手）
- 都市テリトリーオ（都心） 福井恒明
- 江戸周辺テリトリーオ 根崎光男（法政大学人間環境学部 教授）
- 江戸・東京と周辺地域 馬場憲一（法政大学 名誉教授）

パネリスト：

陣内秀信

小島聡

高村雅彦（法政大学デザイン工学部建築学科 教授）

栗生はるか（法政大学デザイン工学部建築学科 教務助手）

閉会 岩佐明彦 法政大学デザイン工学部建築学科教授 / 副センター長

## 第一部 研究発表

2019 年度報告会第一部は、3 名が研究発表を行った。

はじめに、長らくテリトリーオの研究を手がける樋渡彩客員研究員(近畿大学工学部建築学科 講師)が『テリトリーオ研究の展開——ヴェネツィアから瀬戸内へ』と題して、日本におけるテリトリーオ研究に向けた発表を行った。樋渡研究員は、ヴェネツィアの中心部だけでなく、ヴェネツィアとそれを支える周辺地域の視点から建築や都市を捉える研究に取り組んでいる。

ヴェネツィアは 2 段階の後背地によって支えられていることが述べられた。一つはヴェネツィア周辺に広がる自然豊かなラグーナ(潟)であり、もう一つはラグーナに注ぎ込むピアヴェ川、シーレ川、ブレンタ川など多数の河川流域である。

まずヴェネツィアと密接にかかわってきたラグーナについて報告された。

ヴェネツィア共和国時代、ヴェネツィア本島の地形を維持するためにラグーナ全体の水循環に配慮した治水事業が行われてきた。ラグーナは漁業や農業、製塩業など食料供給の場として人々の生活を支えてきた。また島々には貴族の別荘や宗教施設、防衛施設などが立地し、ヴェネツィアの郊外のような役割を担ってきたことが示された。ここでは、新型コロナウイルスに関連して検疫施設も紹介された。検疫の英語 quarantine の語源は、イタリア語の「40 日間 (quarantina)」であり、ヴェネツィアの外から来た人々や商品をヴェネツィア内に入る前に隔離する日数を意味している。このように、ヴェネツィア本島とラグーナは一体して考えられてきたことが述べられた。しかし、近代化の過程でラグーナは広大に埋め立てられ、20 世紀には大規模な港湾や工場が開発された。また宗教施設は精神病院や軍事施設に利用された。その結果、ヴェネツィア本島とラグーナは切り離され、人々の意識からもラグーナの存在が薄れて行ってしまう。こうしたなか、1966 年の大水害をきっかけにラグーナ全体を捉える視点が再認識されるようになる。工場の地下水のくみ上げによる地盤沈下で、頻繁に水害をもたらすようになったことから、地下水の汲み上げが禁止された。工場排水による汚水問題も取り上げられるようになり、ラグーナ全体の水環境に関心が向けられた。1980 年代には、廃墟となり放置されていた島々の利活用を検討する動きが見られるようになる。

そして近年、ヴェネツィアとラグーナを切り離して考えるのではなく、「ヴェネツィア=ラグーナ」というヴェネツィアとラグーナを一体として考える動きが出てきていること、精神病院や軍事施設のあったネガティブなイメージの島々が大学や超高級ホテルに蘇り、ポジティブなイメージへと意識変化が見られることが紹介された。さらに、これまで飽和状態と言われてきたヴェネツィア観光だが、新たな時代にふさわしい観光の在り方として、ラグーナの自然環境を最大限活用する重要性が示唆された。

次にヴェネツィアを支えたもう一つのテリトリーオであるテッラフェルマ(本土)について、ピアヴェ川、シーレ川、ブレンタ川流域について具体的な地域像が示された。これまでのヴェネツィア歴史研究は、海洋都市ヴェネツィアとして海を介したネットワークが注目されてきたが、樋渡氏は、海とは反対に広がる本土について、とりわけ河川流域に目を向けた地域形成論の研究に着手している。河川を活かした産業が興っていたこと、舟運や筏による木、石、鉄などの物資やワインやチーズなどの加工食品、さらには飲料水などもヴェネツィアに運ばれていたことなどモノやヒトによってヴェネツィアと周辺地域のつながりが育まれてきたと報告された。ここでは、博物館史料など、個々の地域の郷土史をもとに、流域を軸にして、地域全体のつながりを掘り起こす方法が示された。また、こうした視点から地域を捉えることで、新たな文化圏、経済圏、テリトリーオを描くことにつながる可能性に触れた。

現在は、瀬戸内を対象として、航路、陸路、造船業や製塩業などの産業、食など様々なキーワードをもとに、

テリトリーオ研究の展開——ヴェネツィアから瀬戸内へ

近畿大学工学部建築学科 樋渡彩



ラグーナ上空

ラグーナ(潟)に誕生したヴェネツィアは、あらゆる資源や食料を外に依存せざるを得なかった。水運網によるアジア圏とのつながりがなければ、本土との密接な結びつきが重要だった。今回は、ラグーナに注ぐ河川沿いの地域とどのように結びつきながら発展してきたのかを見ていく。



石予島

かつて全国各地に共通の社会的経済的基盤をもち、文化的アイデンティティを共有する特徴ある地域が形成されていた。都市とその周辺に広がる農村、あるいは山岳と一体となって有機的に結ばれる地域(テリトリーオ)である。瀬戸内海とその周辺地域からなる「瀬戸内」には、様々なテリトリーオが育まれてきた。向島にみる人、モノの往來が発展した。さらに、瀬戸内海に注ぐ河川流域を通じて、上流域と沿岸部や島々とのつながりも形成されていたのである。このように育まれてきたテリトリーオについて考察する。

### 3 今後の活動に向けて A Vision for the Next

大小さまざまな地域構造を一つ一つ再構築する研究に取り組んでいる（2019 年度報告書 p.28 に掲載）。そして各テリトリーオの広がりや重なりを読み解き、新たな瀬戸内の枠組みとして「瀬戸内テリトリーオ」を提示することを試みている。

デザイン工学研究科（高村雅彦研究室）修士2年の福地昂弥氏（法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻）は『造船業からみた湊町—牛窓を中心とした瀬戸内テリトリーオ』として発表を行った。瀬戸内海の港町を代表する産業として造船業が成立した背景にある自然環境や歴史、現代空間に受け継がれている土地利用などを紹介し、「造船のテリトリーオ」によって支えられた岡山県牛窓のダイナミックな変化を提示した。なお、本発表の元となった修士論文の研究成果は、本学デザイン工学研究科紀要論文集に掲載されており、本報告書 p.18 にも転載収録している。



最後に、清水淳客員研究員（北川かつぱの会代表）による『フィールドサイエンティスト廣井敏男の環境思想と実践—狭山丘陵の里山保全運動の中心的存在—』（2019 年度エコ研報告書 p.26 に概要を掲載）と題して発表があった。市民による地域の環境保全運動の思想的バックボーンとなった「社会化された自然」概念を紹介しながら、フィールドサイエンティストとしての廣井敏男の個人活動、順応的管理などを活用した制度の変遷を含む地域実践の変化について検討した成果が共有された。

#### 廣井敏男 (1933-2017)

- 1933年 群馬県生まれ(田中正造と同郷)
- 1965年 東京大学理学博士(植物生態学)
- 1969年 東京経済大学助教授(1978年教授)
- 1971年～ 狭山丘陵の自然保護運動に参画
- 1980年 狭山丘陵を市民の森にする会代表  
→早大建設計画反対運動
- 1984年 雑木林博物館構想をまとめる
- 1998年 トトロのふるさと財団初代理事長
- 2004年 東京経済大学退職、名誉教授
- 2017年 死去

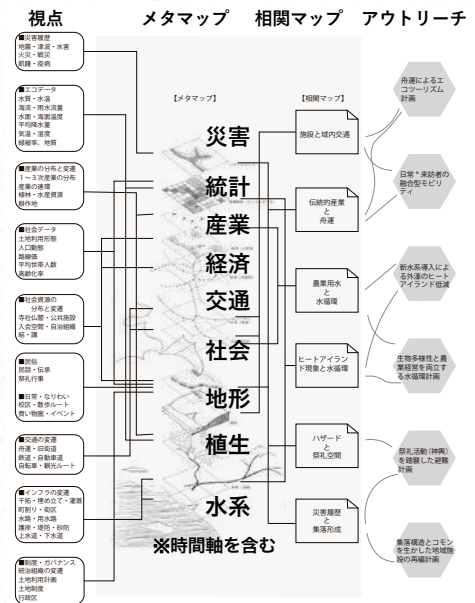


## 第二部 ディスカッション「テリトリーオの理論と実践の展開」

### 1. テリトリーオ概念の概要

**福井** 2019 年度報告書に、科研費申請内容から研究提起として書き直した「テリトリーオの地域と包括的デザイン手法の開発・研究結果について」という記事があります。今日の報告会ではすでに3回目の説明になりますが「テリトリーオ」とは「地域」を意味するイタリア語で、都市とその周辺領域における環境や社会経済・歴史文化、その関係性を含んだ概念です。さきほどからいくつかのフィールドでのテリトリーオの考え方について紹介があったように、この考え方をを用いることで新たな地域の考え方を再生する、価値付けを考えようということです。

2019 年度報告書の 57 ページ「テリトリーオの表現手法とその活用イメージ」図(右図)が、研究としてテリトリーオを考えていくときの枠組みになっています。一番左側が地域の状況を示す情報、視点です。さまざまな視点があるわけです。下のほうから、制度、ガバナンス、インフラの変遷、交通の変遷、なりわい、民俗などが積み重なることによって地域ができていくだろうと。場所によって、どのレイヤーに注目するかは変わってくると思います。場所ごとに特徴を捉えながら、われわれの専門性を生かして把握していくことが、第一段階です。かつては専門ごとに分かれていた、しかしテリトリーオとしては全体像を引き受ける、そのためのプラットフォームを作ろうとしています。基本的には地図がベースになると思いますけれども、図の中に、メタマップの関係性から、地域とありますけれども、これを積み重ねていきます。しかし、例えば、水系のレイヤーの広がりや解像度と、それから交通、社会といった、それぞれのレイヤーごとの解像度は違うはずで



す。瀬戸内という、かなり広範囲に広がっておりましたけれども、たとえば川、あるいは町並みの話になってくると、かなり解像度が上がってきます。それぞれスケールは違うわけですが、一体化して議論することができるようなプラットフォームを作りたい。これまでは同じ地図のディテールを全部重ねていたものが、自由自在に伸縮できるのがこのメタマップのイメージです。それを組み合わせることによって、分析のアップとかいいますけれども、交通とか、伝統的産業と種類とか、農業用水路の循環などにアプローチして、先ほど出ていた「再社会化」などの新しいテリトリーオのあり方を議論して、考えていきたいと思っています。

歴史、文化や、災害の話、ヒートアイランドのような話もある。これを包括的に議論できるのがわれわれの強みじゃないかなと思っています。最終的にはさまざまなアウトリーチとして、地域の再生デザインについて考えて検討しようということを、テリトリーオ研究の枠組みとして本年度は考えました。

同報告書 56 ページの図「テリトリーオ研究の対象フィールドとキーワード」があります。対象フィールドとして、例えば1番目は瀬戸内が入ります。低平地では越後平野あるいは甲州、このあとご紹介いただく北関東、島根半島など、場所ごとの特性を捉えながら何に着目するかを点として加えていくと考えています。特に都市については、かなりレイヤーが複雑になると思います。都心部と周辺ではだいぶ違いますし、城下町のような歴史も分かるところについてどのように捉えていくかは多様ではないかということなど、普通は別々の研究になりがちですが、テリトリーオというキーワードを使って言い換えるというふうに思っております。

同報告書 56 ページの図「テリトリーオ研究の対象フィールドとキーワード」があります。対象フィールドとして、例えば1番目は瀬戸内が入ります。低平地では越後平野あるいは甲州、このあとご紹介いただく北関東、島根半島など、場所ごとの特性を捉えながら何に着目するかを点として加えていくと考えています。特に都市については、かなりレイヤーが複雑になると思います。都心部と周辺ではだいぶ違いますし、城下町のような歴史も分かるところについてどのように捉えていくかは多様ではないかということなど、普通は別々の研究になりがちですが、テリトリーオというキーワードを使って言い換えるというふうに思っております。

### 2. 低平地テリトリーオ

**福井** 続いて低平地テリトリーオの話をしていただきます。担当は岩佐先生と私です。岩佐先生は新潟大から来られましたので、周辺域について非常に造詣が深いということです。私もご縁がありまして、越後平野の潟という湖ですね、潟、ラグーナではないんですが、研究を進めてまいりました。

### 3 今後の活動に向けて A Vision for the Next

越後平野はご存じのとおり、信濃川と阿賀野川の下流部で、地形として日本海から北西の季節風があり砂が寄せて砂丘ができ、背後地に水はけの悪い低地ができています。歴史的には、この砂丘上に都市開発をして港町になっているのと、郊外地では水はけをなんとか良くしようと放水路を開削したり、排水によって広大な稲作地を作って一大農業生産地にした経緯があります。

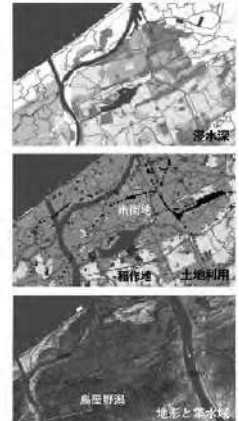
土地利用については、稲作地が中心で、最近では市街地が非常に増えてきている。新潟の市街地で中心になります。それに対して災害のことを考えると、浸水深がこの辺が一番深くて、だんだん浅くなっていますが、そういった面でいろんな問題を抱えています。特にこの図（上図・左下）は新潟大の大熊先生の本から引用させていただいたのですが、日本海の海面標高は T.P+0.5 メートルですが、鳥屋野潟にある潟の水面は-2.5 メートルで、日本海よりも低いところに潟の水面があります。市街地あるいは農地の水を潟に集めて、ポンプで出している。こういう土地ですから、排水、洪水の問題が出てきます。どうやって自然環境としての潟のあり方と、国土を保全するやり方、災害に対する考え方、それから市街地と水場に接しているところをどうやって再生していくか、というのは課題としてあるのではないかと思います。まだ具体的な解決にはなっていませんが、最近では、先ほどの狭山丘陵の話に近づけると、自然環境に対する興味が非常に高まっていて、新潟市自体をラムサール登録の都市にするというような動きも市民から上がってきます。そういったことも含めて多面化していくことがあるかと思えます。

**岩佐** 一緒に担当することになっています岩佐です。新潟大学で15年ぐらい教員をしておりました。いまお話ししていただいたように、越後平野の最大の特徴は、ひとつは信濃川、もうひとつは阿賀野川というほぼ同じぐらいの大きな河川があることです。実はこの2つの河川は下流で合流し、大きな低湿地（潟）を形成していたのですが、200年ぐらい前に阿賀野川が手前で日本海側に抜けるようになり2つの河川として独立しました。樋渡さんのお話を伺って思い出しましたが、実は林業とも大きく関わっていたのが阿賀野川です。この2つの河川は今では関係がないように捉えられていますが、下流域の歴史を考える上で、信濃川だけでなく阿賀野川に関しても検証していくと面白いのかなと思えました。この2つの河川を同じ水系として扱いたがらない一因に阿賀野川の水俣病の問題があるのかもしれませんが、風評を避けるというか、すこし忌避されている部分もあるのかなと思ったところがあります。この辺りをもう少しひもといていくと、水との関わり方みたいなものは違ってくるのではないのでしょうか。まさに大熊先生がフィールドとしてご活躍された場所ではありますが、そういった関わりも調べてみたらいいなと考えました。どうぞよろしく願いいたします。

越後平野（信濃川・阿賀野川下流部）

地形：季節風が作った砂丘  
背後に広がる水はけの悪い低地  
歴史：砂丘上の都市開発→港町  
放水路開削、排水→広大な稲作地

課題：  
土地の維持に膨大なエネルギー投入  
水環境+生態系の豊かさを生かす都市を模索



### 3. 瀬戸内テリトリーオ

**樋渡** 報告書（※2019年度）28、29ページに説明がありますので、見ていただければと思います。補足としては、城下町、重伝建もたくさんあります。基本的には都市史から私はスタートしているので、その街、集落の都市、それぞれの都市形成史、集落史を必ず、さらにその周辺も見ていく。さらに大きい枠組みでどう位置付けられるかを手がけていきたいと思えます。福井先生がカテゴリー分けしておられます、低地、都市、離島も含めすべて瀬戸内には当てはまると思えます。総合的なものを見ようというのが、瀬戸内のテリトリーオになります。

**福井** どうもありがとうございました。北関東については堀尾さんは残念ながらご欠席ですので、石神先生



にご報告をお願いいたします。

#### 4. 天竜川のテリトリーオ

**石神** 石神です。僕の前に、内陸部ということで堀尾さんが桐生について発表する予定でしたけれども、僕は天竜川です。福井先生と岩佐先生のご発表は信濃川で日本海に流れるので、太平洋側に行く代表的な川として天竜川をテリトリーオとして考えてみたいと思っている次第であります。

『水都学IV』のとき、東京の水車についていろいろ見てみたときの、民間の王子製紙のことです。千川上水、それから石神井川、滝野川、その水車、大砲を作る工場ができましたが、その後、鹿島紡績を作る計画があって、最終的に明治の初めに製紙工場になるんですね。飛鳥山のところに行くと、博物館に資料が置いてあって、王子工場の次の新工場として今回の天竜川の明治 20 年代に気田工場というのが出てきます。王子工場のときには原料は東京で出るボロとか、近郷の藁であったのですが、気田工場的时候は、紙の作り方に技術革新があって、針葉樹で作るようになるんです。日本の中で、動力は当時水車ですから水力と原料があるところをずっと探し回って、結局、両方のあった気田（けた）になる。天竜川の支流の気田川があったところになるんです。動力は気田川の水車で、原料はこの辺りでとれるツガ・モミだとか、針葉樹を使っていたといいます。

その後日清戦争などがあって、新聞がたくさん売れるようになり紙の需要が増えて、気田川だけでは間に合わなくなります。中部と書いて「なかべ」工場が天竜川の本流に移りここに中部工場ができるわけです。さて、写真の和田村は遠山郷、長野県の南ですけれども、山の中のなかなか行きにくい所です。上村とか、湯神楽のある秘境のようなところですが、かつて意外と繁栄していた町が山の中にあります。今でいうとバーだとか、遊興施設がありました。なんでそうなったんだろうと不思議に思います。

山の中ですが、山がどうも寂しいんですね。なぜかという、和田村にあった共有林を売り払ってしまったんです。共有林の立木の伐採権を地域のある人が売り払って、巡り巡って最後は王子製紙が買う。ふつう単なる伐採権はなかなか行使できない、切るのが大変だからです。でも王子製紙は買ったとたん伐採を始めた。ここで切ったのを持ってきて中部で製紙を行う。当然、本流の巨大な水力で、たくさんの紙ができる。王子製紙のまさに本格的なスタートなんです。

その後さらに拡大するために樺太だとかに主力工場が移ります。結局、なぜ和田村近辺が繁栄していたかという、当時、下流の中部工場への製紙原料があったからというわけです。王子製紙の社史とか、森林の管理記録を読むと、色々書いてあるんですけども。今はどうなっているかという、この中部工場のところが佐久間ダムになるわけです。

それから水車の関係では、岡谷の製糸。これは最初の頃の岡谷の写真です。この工場が水車で動いている。岡谷から天竜川を下って飯田下伊那に行くと、かつて養蚕が非常に盛んで絹糸を扱った人たちが沢山いました。現在それが精密機械とか、要するに細い絹糸を扱っていた人たちの技術が銅線をあつかうようになったわけです。モーターとかコイルとか、諏訪の辺りも飯田の辺りも精密機械です。現在では航空機用の計器などの高技術産業にだんだん変わってきていますが、ルーツがつながっているようです。

天竜川は非常に面白いところで、上流に湖があって、真ん中が盆地と峡谷があって、最後に三角洲があって、全体の地形が複雑です。下流の二俣から平地になる。天竜川の峡谷からの出口で、明治 12 年に遠州二俣紡績ができています。今は跡はないですが、この天竜川がカーブしているところに水路を作って水車を回し、紡織、紡績をしていたということです。歴史を色々ひもといてみると、豊田佐吉がここに入社しに来て結局は断られたりしています。



それから木材について。先ほどの樋渡先生のお話と同じように、上流中流で切った木をいかだで流して、最後に浜松の掛塚というところに持っていきました。掛塚は今は何もないようなところなんですけど、これが当時は非常に盛んに繁栄していた掛塚湊というところでした。天竜川の木材は幕府の御用材として、江戸へあるいは大阪へ送られる中継地というわけです。

近代以降、河口付近の木材産業は結局どうなったかという、送られた木材を乾燥させて、ヤマハなどのピアノの木のベースになっているとか、木工が非常に盛んでした。また、もともとこの辺りは綿の栽培が盛んで、これが遠州紡績が来た背景ですけれども、天竜川と綿、これによって地域のいわゆる織物の機械を作る会社ができます。これはトヨタの元祖の豊田佐吉と関係があります。それからスズキ自動車の元の鈴木織機もできる。それを見て本田宗一郎という人が二俣に生まれるんですけども、工夫してオートバイを作ろうというんですね。今日につながる様々な産業のルーツをいろいろ考えるのに天竜川は面白く、改めて総合的にテリトリーを天竜川を通して考えてみたい。

現代的にはここは流域圏構想の非常に典型的な例でもあります。「三遠南信」、三河、遠州、南信、この3つの圏域です。ここには三遠南信道という縦の高速道路が2020年代にできますし、また横にはリニアが天竜川と交差して飯田に駅ができる。これからますます注目を浴びるところともなっています。

**福井** ありがとうございます。続きまして、高見先生、よろしくお願いいたします。

## 5. 斐伊川、島根半島地域の水辺とまち、浦、社

**高見** 写真だけをつなげたスライドを映しておりますが、なぜ斐伊川かという話が当然あるかと思えます。2016年度に、エコ研として斐伊川の河口部の境港市から仕事を受けて、例の水木しげるロードリニューアルに私が関わったんですけども、その関係と、私の両親が松江出身だということも当然ありまして、この辺りにちょこちょこ行っていたわけです。

下のほうの写真ですけども、松江の街というのは極めて水が近い。つまり、干満差が50センチメートルぐらいしかないんですね、境港のところで。私は関東で育ちましたので、海というのは1日に2メートルぐらい上がったりがったりするものだという認識があったわけですが、極めて水が近い街があって、それでも洪水にならないというので、その治水の形状に当然興味を持ちました。上のほうの絵ですけども、これが古図です。斐伊川っていうのは八岐大蛇伝説がありまして、また斐伊川がめちゃくちゃな暴れ川なので、それが八岐大蛇という話に変わっていったんじゃないかということで、斐伊川の治水と、沿川の街の松江、境港とか、内海になった水辺の街が、興味としてわいてきたんです。

昨年度(2018年度)、国内研究で島根大学に行かせていただいて、2カ月弱滞在をしていたわけですけども、要するにここは伝説とか、神々の街ですし、伝説のようなものに全てが由来しているのかなと思ったところに、もう一つ種を見つけました。四十二浦とですけども、島根半島にある42の浦に42の神社があって、出雲大社もその一つです。42の浦で塩を汲んで、供えながら順番に参っていく風習のようなものが江戸時代からあって、古事に由来を持つ八岐大蛇の川と、出雲大社を中心とする神社群との組み合わせでこの地域のすべてはできている、川と海、両方の水辺に着目して、これは面白そうだなと思いました。

同じような話で、中海、これはかつて干拓が予定されていたんですけども、いろいろなことから干拓を逃れて埋めないことに決まったわけですけども、干拓用に作られた、この海の中に作った道があるんです。これはもうこのまま残しておくということになっているんですけども、これまた非常に水に近いんですよ。堤防も何もなくて、ほんとに海の上を車で走っているような道ですけども、そういったこの地域の水との近接性の



ところに着目して、神々の国としてこの一連のものを調べたらすごく面白いんじゃないかなと思います。

松江とか鳥取とかいうと、人口が一番減って、とっても悲惨な街じゃないかと皆さん思っているんじゃないかと思うんですけど、1カ月半ほど滞在していましたが、住んでる皆さんは実に楽しそうに、非常に明るい街です。非常にいい感じで。行く前にちょっと調べたんですけど、極度の人口減少と高齢化が通り過ぎちゃった地域なんですよ。もう安定に向かうので、こういった地域の特性、歴史とか文化を捉えて、人口が減った後の安定社会の、今後のあるべき地域性みたいなことを考えるというのが、もう一つの狙いでもあります。

四十二浦は踏破してあって、写真も全部撮ってあって図面等も集めてありますが、全然整理がついていないので、まずはそれから始めたいと思っております。

## 6. 浜・離島テリトリーオ

**福井** 続きまして、浜・離島テリトリーオについて金谷さんからのご発表の予定でしたが、本日はいらっしやいませんので、代読したいと思います。新島というのは伊豆諸島の新島のことです。

「科研費のブレストをしていた頃に、「離島テリトリーオ」のキーワードとして上がっていた固有資源について本日は話をしようと考えておりました。そのため、テーマであるテリトリーオとは少し話がずれるかもしれませんが、ご容赦ください。

新島は石造の建物や石塀による町並みが多く残っている事で知られていますが、近世期は民家は茅葺きで石塀もない小さな集落で幕府直轄領の流人地でした。地図(資料左)は、江戸や各湊とのつながりを示す絵図で、各湊が線で結ばれその方位と距離が描かれ、特産品などが書かれています。その頃の主な産物は魚介類や椿油です。新島が石の町となるきっかけは明治3年の大火で、昭和初期のムロアジの大漁により経済的に潤った島は、道路舗装を行うなど、この時期にコーガ石による耐火建築を建てるのが島内で一気に広まります。しかし、全国から漁船が集まり乱獲されたため、徐々に漁獲量が減り、戦後にはムロアジをこの海域で獲ることは難しくなってしまいます。青森、北海道のニシン漁と同様の話です。漁業と置き換わるように、コーガ石の採石業へと産業が変わり、1970年代に採石業のピークを迎えます。コーガ石は戦前は耐酸性の石材として陸軍などで使用され、戦後は化学肥料工場にて用いられました。また、内装材として戦前から活用されており、ピアホールとして有名な銀座ライオンの天井仕上げにはコーガ石が用いられています。ムロアジ同様、コーガ石も良質な石を採石することができなくなると、代わるように1980年代の旅行ブームが起こり、今度は観光業へと産業は移行します。

この観光業の発展により屋敷内の建物の建て替え、民宿の建設ラッシュにより、RC 建築が増えます。コーガ石のサイズは規格化され、敷地内にストックを置いていき、それがあまる量まで集まると石造の建物を建てたといわれています。現在では修理用のストックといわれていますが、それを修理できる技術者も今はいません。産業が変わるたびに集落の景観が変わっていきましたが、いまだに多くの近代期に建てられたコーガ石建造物が残っています(写真上)。しかし、2019年の台風15、19号の被害により急速に解体の動きが進んでしまいました。そのような町並みがなくなってしまうようきちんと調査し、産業と集落構造の変化を固有資源を通して解き明かしたいと考えています。また、幸い地域内にもコーガ石の建物を残したいと活動を始められた方々があり、その方たちとも協力し良い形でコーガ石の町並みを残していけたらと考えています。そのようなお話を本日はさせていただき予定でした。

申し訳ございませんが、本日の欠席についてお許しいただきますようお願いいたします。」

**福井** 以上です。非常に面白い写真を見せていただきました。馬場先生、一緒に行こうとおっしゃっていま



した、まだ行かれてないかもしれませんが、コメントがございましたら。

**馬場** 福井先生がお話しになったように、新島は、伊豆七島の一つです。白浜の海岸があり、非常にきれいな島です。地中海の島々を思いださせるような所で、私も何度も行っています。特に1990年代に新島の村史をお手伝いさせていただいたことがあり、その頃はよく行きました。

新島の産業の歴史を話していただきましたけれども、その前史として新島は、特に江戸時代は江戸地廻り経済圏との関わりで、まさに江戸とのつながりの中で塩業、要するに塩作りが盛んであったというようなことも盛り込みながら考えていく必要があるかと思います。また、皆さんご存じかと思いますが、新島では「くさや」の生産も江戸時代からやっています。たしか、くさやの生産はこの新島が発祥地で、今でも生産しています。魚を「くさや液」に漬けて発酵させて作りますが、最近、台風などの災害でくさや液が少なくなり、生産があまり芳しくなくなってきたと聞いていますので、新島の産業構造もだいぶ変わってきているのではないかと思います。

新島にはコーガ石の建物がたくさん建っていますが、最初に島を訪れた時は建物を見てブロック塀の家なのかと思っていました。後で聞いたら、島で生産されたコーガ石で造った建物で、非常に価値あるものだという事を知りました。できれば、伝統的建造物保存地区に選定して、保存が図られるといいなと思っています。最近、新島には東京など首都圏から休日を利用して行く若い人が非常に多いんですね。コーガ石の建物を島おこしの「核」にしようとか、特に島外の若い人がまちづくりに関わってきているのが新島の現状だと思います。金谷さんがこういうご研究をされる時、ぜひいろいろな視点からやると、特に、テリトリーオの視点からは興味深いフィールドになるのではないかと思います。

**福井** ありがとうございます。金谷さんが戻られましたら、改めてお話を伺いたいと思います。

## 7. 都心テリトリーオ

**福井** 次は都心です。通常ですと江戸城外堀とかの話をよくするんですが、きょうはもう少し広い範囲で、この後につなげようかと思っています。

スライドをご覧くださいますと、画面には玉川上水の全体像が書いてあるんですけども、地形としては、武蔵野台地の端で海に面した城下町ということですが、きょう見ていて初めてあつと思ったんですが、領域としては、江戸武蔵野、つまり江戸の西側のテリトリーオと、それから関東全体に行くような東側から北東部に行くようなテリトリーオと、それから私は全然研究していませんけれども、先程の内海の話と同様に、江戸湾もテリトリーオとして考えられます。これらのテリトリーオが3つ重なっているのが江戸じゃないかと考えていました。



武蔵野は玉川上水が中心になっていて、江戸城下町への水供給と武蔵野開発が中心になった。そして江戸から東関東は舟運網で東北にも至るような広域流通網。さらに江戸湾は、湾内の漁業や産業ではないかと。完全に想像ですが、これらが重なるととても面白いところとして江戸は捉えられるんじゃないかと思っています。

現代に戻ってくると、都心特有の水の多義性が面白くて、初めは用水だったものが、堀では防御になり、もう少し下がって運搬路になっていく、その水の変り身、多義性が興味深いと思っています。

課題としては、多義的な水の価値の再興。さきほど、再社会化のお話がありましたけれども、この都心の水をどう再社会化するか、インフラのおかげで水を便利に使えるようになりましたが、そういう意味では、社会から切り離された単なる資源だったものを改めて社会化することの方法や方針。水環境の価値を顕在化させることを、どうしたらいいのか課題ではないかと思っています。有り体な言葉ですけども、実益型の投資からの脱却を改めて考えることが、都市にとっては重要ではないかと思っています。

私が直接関わるような話でいいますと、千代田区内は川沿いの再開発がかなり進んでいます。再開発の多くが水との関係を意識はしています。川沿いだから浸水対策を設けようとか、広場を設けようなどがあるものの、敷地内でしか利用できていない現状があります。連続する水源の価値を生かせない都市計画制度の再構築も議論としては始まっています。むしろ行政よりも民間の業者さんのほうが興味を持っている状況もありますので、この動きをうまく活かせば、歴史的な話から現代的な話までつながるのではないかと希望を持って、さまざまな場所で検討したいという状況です。

続きまして根崎先生に、「江戸周辺テリトリーオ」ということでご紹介いただきたいと思います。

## 8. 江戸周辺テリトリーオ

**根崎** 私はこれまで「テリトリーオ」概念で江戸周辺を捉えたことがありませんでしたが、この概念を用いてどんな江戸周辺領域論が提示できるかということをご報告していきたいと思います。

ここで「江戸周辺」とは、江戸の町から日帰りの範囲ということをご想定しています。歴史史料にみられる江戸周辺を示す歴史用語には、その初期には「江戸廻り」「江戸近辺」と呼ばれていたものが、その中期に「江戸十里四方」「江戸五里四方」という呼称に収斂していくということがあり、これは江戸の日本橋から五里、だいたい半径20キロメートル圏内を示す江戸周辺一帯の歴史的枠組みで、江戸の町を含む領域でした。「江戸周辺」を考えると、江戸の周辺だけではなく、江戸と江戸周辺を結びつけている領域一帯のことを、ここでは「江戸周辺テリトリーオ」として捉えていきたいと思います。この領域を、政治・経済・文化という3つの側面から、江戸と周辺農村がどのように有機的な諸関係を結んでいるのかということをご考えてみたいと思います。

そこでまず、江戸幕府が支配領域として設定している「江戸十里四方」「江戸五里四方」と呼ばれる江戸周辺の地域的枠組みを紹介していきます。歴史研究の上ではまだ研究が進んでいませんが、1980年代に江戸幕府が関東の地域をどのように編成していたのかという地域編成論の研究が行われ、そのなかで江戸の周辺地域がどのような政治的役割を果たしていたのかという点が究明され、私が構想したものが以下のようなものです。江戸の周辺地域は、江戸幕府による「江戸十里四方」「江戸五里四方」という歴史的な枠組みで広域支配が行われていました。この領域は何を目的とした枠組みかといいますと、鉄砲の所持・使用の取り締まり領域、鉄砲火薬の製造禁止領域、鳥類の保護領域、將軍の鷹狩り領域とされていました。たとえば、鉄砲の所持・使用がもっともきびしい領域が「江戸十里四方」であり、この領域では近世後期に鉄砲火薬の製造も禁止されていました。また鳥類保護の取り締まり区域として「御留場」という歴史用語があり、これも「江戸十里四方」という地域を対象に行われていました。ここでは一切の鳥を捕ってはいけないという領域であり、そのために村人たちにその監視を義務づけていました。

「江戸十里四方」の範囲については、鉄砲の所持・使用を取り締まる役所、火薬製造を禁止する役所、御留場を管轄する役所によって、「江戸十里四方」の地域を対象としながらその管轄範囲は異なっていました。鉄砲取り締まりの役所（大目付が兼帯した「江戸十里四方鉄砲改役」の担当）は「江戸十里四方」を対象としていましたが、その範囲は享保年間(1716～1735)に江戸日本橋から東西南北に五里四方と規定されました。一方、「御留場」が対象としている「江戸十里四方」は、江戸日本橋より半径十里四方でした。

また「江戸五里四方」という地域的枠組みでは、鷹場の種類で「御拳場」という種類がありますが、これは「江戸五里四方御拳場」という文言が示すように、將軍が鷹狩りに出かける領域が「御拳場」で、それは江戸日本橋から半径五里四方の地域でした。そのほか、浪人の取り締まりだったり、江戸城で必要なさまざまな物品（これを「江戸城御用物」「上ヶ物」という）を調達する領域、たとえば江戸城で飼っている鳥の餌としてのオケラやミミズを上納する領域が、「御拳場」という枠組みで行われていました。特に、江戸城への「上ヶ物」の上納は当初江戸日本橋より十里四方の村々により行われていたものが、享保期から江戸日本橋より五里四方（「御拳場」）の村々より上納されるようになりました。

「江戸五里四方」の幕領年貢については、江戸の米蔵に運ぶ決まりがありました。何か不測の事態が生じた

ときには、江戸に米を備蓄しておかなければいけないので、特に「江戸五里四方」の村々の年貢は「御城米」と称して江戸に運ぶことが義務付けられていました。このように、江戸周辺の防衛、環境保全、治安維持、物品調達と関わって、つまり江戸城を支えるための将軍家の「私的」領域として「江戸十里四方」「江戸五里四方」が設定されていたと考えられます。これは「江戸城城付地」と呼べるものであったと思われれます。

次に、文化的な枠組みとしての「江戸周辺」について考えてみたいと思います。その一つに江戸名所の領域があります。江戸の人々が信仰や娯楽、気晴らしとして出掛ける江戸名所の範囲が、日帰りで行けるお寺や史跡、自然であったといえます。江戸名所の場所を調べてみると、すべて日帰りで行けるところで、「江戸周辺」という枠組みで捉えることが可能です。現在の地名でいいますと、西側の神奈川県は横浜辺り、北は埼玉県の東宮辺り、東側は現在の千葉県の船橋辺り、南は江戸湾岸までが江戸名所の範囲で、いわゆる「江戸十里四方」「江戸五里四方」という範囲とほぼ同じ一致しています。そのほか、江戸の市民や江戸周辺の農民が一緒になった文化サロンも存在していました。俳句とか絵画などのサロンが形成されていて、外国人が入っていたりもしています。幕末期ですと、絵画をみんなで鑑賞して評価し合うようなサロンも存在していました。それから、江戸図屏風と呼ばれる絵画がありますが、描かれているのは江戸だけではなく、江戸周辺を含めた領域が屏風に描かれていることが一般的です。

さらに、経済的な枠組みとしての「江戸周辺」もあったように思います。江戸と江戸周辺の間には物質が循環し合う領域でもあり、江戸と周辺地域とは共生関係にもある領域でした。たとえば、江戸周辺農村で生産された穀物や野菜が河川を使って船で、あるいは街道を使って馬で江戸の町に運ばれ、一方で江戸の町の排泄物は下肥と呼ばれて江戸周辺農村に運ばれ肥料となりました。この下肥で育てられた穀物や野菜が江戸に出荷されていたわけです。江戸と周辺農村との間で物質が循環し、共生関係にあったのです。もちろん、これまでの歴史研究により、経済的には江戸の周辺農村が江戸の町を支える物質の供給地としての役割を持っていたことが既に指摘されているわけですが、これが一体どこからどこまでなのかということは、あまり研究が進んでいません。そこで、テリトリーオ概念を用いて物質循環の範囲や仕組みを説明していけるのではないかと思っています。

かつて下肥が物質循環という見地からどのように推移したのかを論文にまとめたことがあるのですが、近世中期まで江戸の排泄物は無料で回収された廃棄物でしたが、それがしだいに価値を生んで商品として扱われるようになりました。その結果、江戸の武士・町人と江戸周辺の農民とが個別に下肥売買の契約を結んで江戸の排泄物を江戸周辺農村に運び、その排泄物が下肥と呼ばれる肥料となり、穀物や野菜が生産されるという物質循環とともに共生関係が出来上がっていました。河川沿いの農村では肥船、茶船と呼ばれる船で運び、内陸部は馬を使って運んでいたのです。

それと、江戸の町に旅行でやってきた人や仕事でやってきた人などが便をもよおしたときに、どうしていたのかが気になっていたのですが、江戸の町には公衆便所が建てられていたのを初めて史料で確認しました。この公衆便所が「小便溜桶」と呼ばれるもので、江戸周辺の農民たちが江戸の住人たちの許可を得て江戸の町のあちこちに建てていました。江戸の町には江戸周辺の農民たちが建てた小便溜桶が天明年間(1781～1789)におよそ160カ所も存在していました。なぜこの史料が作成されたのかというと、江戸周辺の農民たちがとにかく小便溜桶を江戸の町に建てたいので、建てていい場所があったら教えてほしいと町奉行所に訴え出たことがきっかけでした。いつごろから建てられたのかはわかりませんが、下肥の需要が高まった宝暦年間(1751～1764)ごろからだったのではないかと推定しています。このように、農民たちが公衆便所を建てて、排泄された下肥を村に持ち帰るシステムが出来上がっていったのです。しかし、江戸の山谷とか浅草の近辺には畑を持っている人たちがいて、排泄物を下肥として利用しているので小便溜桶は必要ないと言っている地域もありました。一方、小便溜桶を建ててくれることを望んでいる本所などのような町もありました。江戸の町人・武士たちの排せつ物を農村に運び出すだけでなく、江戸周辺の農民たちは積極的に江戸の町に小便溜桶を建ててその排泄物を村に持ち帰って下肥として利用していたのです。江戸と周辺農村との共生関係は、村側の積極的な働きかけによってより強固になっていたのです。

このように、江戸と江戸周辺地域では政治的・経済的・文化的にも「江戸周辺テリトリーオ」と呼べる枠組みをもっていたように思います。

**福井** ありがとうございます。最後は馬場先生に「江戸・東京と周辺地域」をご紹介します。

## 9. 江戸・東京と周辺地域

**馬場** 馬場です。私はとりあえず研究の視点や、私自身もテリトリーオをあまりよくわかっていない中で色々と考えて試行錯誤し、こういう研究だったら自分がやっていることや興味とつなげられるのではないかなと思ったことを報告します。それだけでは面白くないので、事例も少しお話しさせていただきます。

江戸・東京と周辺地域を、テリトリーオという考えでみていくと、現在の東京都域と、それよりも少し広い地域を対象としていくことになるかと思えます。研究の視点としては、自然地形を視野に入れ、その地形の上で展開する江戸・東京の歴史を考えていくということです。つまり江戸城は武蔵野台地の上に築城されており、南のほうに展開する多摩丘陵、西に位置する関東山地。そして東京の東部には低地帯があります。この地形の中を多摩川、隅田川、江戸川という川が流れていて、私は江戸・東京と周辺地域の歴史はこの地形が織りなす自然環境の中で展開してきているという認識を持っています。

江戸・東京とその周辺地域の歴史研究の対象には、根崎さんの報告にあったように、政治支配に関わるような話をはじめ、経済や産業、交通、さらに治水や災害などもあります。それらの研究対象はすでに先行的な研究が行われてきていますので、それらを織り交ぜながら私は宗教や観光などにも着目しながら、人々の生活史という視点からその歴史を考えていきたいと思っています。

つぎに分析の内容ですけれども、やはり近世と近現代における江戸・東京がテーマですから、その都市と周辺地域との有機的な関係ということで、都市と周辺地域とが支え合うような関係性、つまりその関係は双方向性がないと成り立たないので、やはり江戸・東京(= 都市)と周辺地域との交流という中において、歴史的・文化的な空間の「場所性」を分析し明らかにすることです。具体的な研究テーマとしては、テリトリーオの中の「歴史的文化的環境」、この「歴史的文化的環境」という用語は私が作ったんですけれども、その環境に着目して、その環境がどのように形成され展開してきたのかということをも明らかにしていきたいと思っています。

歴史的文化的環境と言われても、どういうところかわからない方もいるかと思うので、パワーポイント画面の6番目のところに具体的な研究対象地として、井の頭だとか、高尾山、武州御嶽山、滝山城跡、玉川上水、小金井サクラ、谷保天神、それから石神井城跡と三宝寺池などを事例として並べてみました。訪れた方もいらっしゃるかわかりませんが、写真などから研究対象とする場所のイメージを膨らませていただければと思います。

私は歴史的文化的環境を人々の心性、要するに心の問題として、その場所に対して懐古したり、ノスタルジアとか、場所における願望もあるかと思っています。例えば井の頭には弁財天社がありますが、そこは信仰に関わる願いや、訪れることによって憩う場でもあり、昔を思う場所でもあって、心性に関わる場所として捉えることができます。その場所がどういう「場」として形成されてきているのか、史料を使って歴史的・伝説的な由緒とともに、特に歴史学ではあまり「伝説」を史料として取り扱わないのですが、1980年代ぐらいから、例えば『記憶の場』という本をピエール・ノラというフランスの社会史を専門とする歴史家が出版していますので、その場所を“記憶の場”と捉え、そういう視点から分析していくことを考えています。つまり自然や宗教、信仰、娯楽、観光、記憶などの構成要素からその場所性を考えていきたいと思っています。

事例を挙げながらお話しさせていただきたいと思っています。井の頭はいらした方がいらっしゃると思いますが、都心からだいたい20キロメートル圏内だと思います。その井の頭という場所をみていくと、そこは実際には源氏とのつながりを持っている伝統的な貴種性と、時の権力者の権威性などに結び付いた伝承的な由緒ある場所として江戸時代以前から認識されていたようです。その後、江戸時代に入ると、湧水、池、河川、樹木などによって形成される自然環境を有する場所とも捉えられるようになってきます。つまり、歴史性を帯びた

歴史的文化的環境として捉えられていた場所が、江戸時代中期頃から文人で狂歌師の大田南畝、地理学者の古川古松軒などたくさんの江戸の文化人が訪れ、紀行文を書いています。古い場所であるという認識とともに、自然が豊かだと紀行文の中に記述していて、景勝地という認識でも捉えられるようになってきています。

江戸時代の後半に至って、井の頭は「名所」と位置付けられ江戸の市民に親しまれてきています。同時に井の頭は神田上水の水源にもなっているので、江戸の庶民が神田上水に関わる場所ということで弁財天社に石造物の灯籠、手洗いの石、階段だとかを寄進しており、信仰の対象としてその場所が有効に機能していたということがわかります。そして近代に至って「井の頭恩賜公園」として開園し、現在に至っているのです。このような分析手法で研究対象として先ほど事例に取り上げたような場所をテリトリーオ研究の中に位置づけることができればと思っています。

**福井** どうもありがとうございました。

## 10. パネルディスカッション

**岩佐** みなさんありがとうございました。ここからパネルディスカッションということで、ぜひ積極的なご発言をお願いいたします。冒頭に、それぞれテリトリーオという部分をどう考えていくかということをご発表いただきました。テリトリーオに関する概念整理を科研の申請で8、9月頃に福井先生や金谷さんと進めたのですが、一段落ついてテリトリーオについて勉強していこうということで、本年度、ちょうど昨年11月ぐらいからテリトリーオ研究会を始めました。11月の末に第1回として、「文化的景観とテリトリーオ」というお題で、北山杉に関する研究と、葛飾柴又の文化的景観というテーマでディスカッションしました。来年度以降はこの研究会を定期的に開催して、今日、色々とテーマを出していただいたことを取り上げながらディスカッションしたいと考えています。今日は頭出しのような形にはなっていて、今から福井先生にファシリテーションしていただきますが、できるだけこぼれないようにフォローして、今後につなげていきたいと思っています。まずここまでお気づきになったことを、パネリストの方にお話しいただければと思います。

最初に科研の申請に当たって、テリトリーオの概念を少しまとめようと、冒頭の概念図のようなものを作る作業はしたんですが、こういうふうに図にしてみると、よく都市計画とかの教科書にあるレイヤー図、重ね合わせの図に似てしまうのが、すごく気になっています。それと大きく違うところは、メタマップという、一つ一つの領域が範囲や解像度で異なる非常に大きいエリアを対象にしたりとか、小さかったりとか、入れ子構造的な形になっている点が大きく違うところかなというふうに考えています。そこら辺が、ちょっとこの示した図ではうまく表現できていないのですが、非常に重要な概念ではないかなと、私はちょっと思っています。

今日はタイトルが、「テリトリーオの概念と実践の展開」で、テリトリーオというお題でお話しいただくんですが、これが非常に使える概念で、展開性が高そうということがわかった一方、少し拡散してしまいそうだという意味で、共通言語、共通で語れそうなこと、共通な概念がないのかということですね。展開していく上での共通点はないのかというところが気になったので、ヒントがあれば教えていただきたいのと、ここでは今回は、あまり議論はされていませんでしたが、展開と理論、理論と実践の展開ということで、実際にどう実践につなげるか、どういうフィードバックの可能性があるかということも議論できればと思います。

清水さんのほうから、フィールド・サイエンティストのお話がありましたが、こういう理論をどう実際につなげていくかが、非常に重要なことだと思います。そのための哲学とか、方法論もこの研究会に含まれてくるんじゃないかなと考えております。まずはパネリストの方に切り口を出していただいて、議論していきたいと思っています、どうぞよろしく願いいたします。

**栗生** 栗生と申します。初めましての方も多いかと思いますが、エコ研には昨年参加させていただいて、エコ研もテリトリーオも初心者で恐縮しています。お隣の文京区で長く地域活動をしていて、建築教育に関わりながら、半分専門家・半分区民という立場で地域で実践を行なっております。普段は見過ごしがちな、けれども魅力ある建物、景観、文化を掘り起こして、その価値を広く共有していくために、それらの再生や活用提

案、見学会、展覧会を開催したりしています。

そういった立場からの意見になりますが、今回、テリトリーオ研究に携わらせていただいて思ったのは、テリトリーオという概念を、私たちの研究会の中で確立していくことは勿論ですが、同時に市民をうまく巻き込んでいくことが、ある段階から必要ではないかということです。

テリトリーオはもう既にあるものの一種の「見方」であると思うんですね。専門の人の間には広がりつつある言葉ですけども、市民一般にはまだ広がっていない言葉です。ただ非常に分かりやすいというか、自分たちのそれぞれの日常を捉え直す手法であり、専門性も横断している捉え方なので、誰にでもなじみやすい概念かと思えます。テリトリーオという見方があるんです、と知らせるだけで、一人一人の日頃の考え方、自身の生活環境との向き合い方が変わってくる。専門家内でのテリトリーオ研究の確立と共に、一般に考え方を広げていく、これを同時にやっていくことが重要だと感じました。そうすることで、ある時点で加速度的にこのテリトリーオっていう研究が確立していくんじゃないかなと。例えば、資金も集まったりとか、協力者を増やしていくことにも繋がるのではと思います。

**高村** 今から4、5年前になります。2015年に韓国の光州で建築史のアジア大会がありました。当時の会長だった、今は青山学院大学に移られた東大の伊藤毅先生が、テリトリーオについて基調講演をされました。終わった後はものすごい反響がありました。大反対の反響だったですね。特にシンガポール大学のウイドト先生は、この研究は都市の領域をただ広げただけではないのかと。都市の周辺のことを郷土史観も含めてしっかりと歴史学でやっている人たちがいる。都市史や建築史からどう周辺史を後押しするのか、ただ広げただけじゃないのかと、実は当時から大きな議論になったのを思い出します。

テリトリーオは大きく2つありまして、歴史学研究とイタリアのテリトリーオの計画学における文化的景観の再生。だから、多分野の人たちがいろいろと関わってやっていく。そうするとそれぞれのディシプリンが違うので、それぞれやっていくことはやっていくんですけども、大きな問題としては全体を貫く軸がない。

この前の研究会でもそうですけども、その報告論文集を改めて読んでわかったのですが、すぐ隣の論文を多分読んでらっしゃらないので、質問をしてもずれた回答になってしまう。つまりディシプリンが多様であるが故に、異なるディシプリン同士でつながらないというのが今までのテリトリーオ研究ではあったと思います。だからこそ日本では、一部の人たちがテリトリーオという言葉を使わずに、「領域史」という言葉を使って展開しようとしています。この人たちは、計画に結び付くものではなくて、純粹に歴史学研究に組み込もうとする人たちです。

樋渡さんが建築学会の雑誌に書く前に、「都市史から領域史へ」（『建築雑誌』日本建築学会、2015年5月）という特集が組まれたときに、都市計画や計画の人たち、たとえば、小浦先生が、あれはテリトリーオではないと批判していました。一方で計画の人たちからはこれこそテリトリーオだ、一方で建築史や都市史の人たちからはこれは歴史研究にはなるのかと、やはり批判を浴びる。

ディシプリンが分散して多様であるがゆえに、統合するのが難しく、全体を貫く軸がないので危険があるのではないか。先ほども地域再編論の話がありましたが、分節構造のことをずっとやられていた吉田伸之先生は、両方ともその言葉を使わずに、「地帯構造」という言葉をもってテリトリーオ的な歴史学をご自身でやられています。千葉県の新がどのように問屋に運ばれたか、静岡のお茶がどのように江戸に運ばれてどこでストックされたかなどをずっと、歴史学の先生ですから、かなり文献資料の読み込みと論拠付けがありました。大きな3つの枠組みがテリトリーオとして日本に入ってきて展開していくときに、われわれはどの分野のテリトリーオでやっていくか。ここ6~7年のテリトリーオに関する日本の動きをある程度押さえた上でやらないと、周辺史論になってしまうと思います。最終的にきょうの話は面白かったので、全部、論文にするととてもいい論文集になると思います。

地域的な点もありましたけれども、その辺りは少し気を付けなければいけないかな。特にテリトリーオをやるとうると、産業とか、生産とか、流通のシステムとかが、なぜか、どうしてもメインになってしまうところがあります。伝統産業をとりあえず取り上げて、制度化、あるいはグループ化したりする。そうすると、町

も地域の再生に関してもどうしても画一的になってしまう。さらには、ずっと時間軸は流れるので、近代を否定した場合はいつの時代に戻すか、重視するのかという、再生といった問題も当然、起きてきます。

さまざまな問題がありつつ、私自身はやはり建築とはどうしても離れたくない気持ちがあります。個人の専門ということもあるんですが、テリトリーオみたいな概念が、建築の振る舞いにどういうふうに影響を与えてきたのか、与えているのかということです。例えば、京都工芸繊維大学の清水重敦さんが、宇治市の茶店にあった歴史的なベンチを再現する。これが文化的景観の再生だということをやっているんですけども、建築に対する振る舞いを元に戻したというようなことなんです。

われわれはこのテリトリーオを対象にしたときに、環境の中の都市や建築という捉え方をする。樋渡さんの、ヴェネツィアがラグーナの一部というのと非常に近いんですが、結局は都市や建築を生態学のアナロジーとして見ていく姿勢の中で、もう一回、建築や都市を見直すのが重要だと思います。都市の周辺部を一生懸命に研究するだけではだめで、都市内にもテリトリーオという概念を持ち込んで考えていかないと、建築に興味のある人間はなかなか結び付いていかない。

最後になりますけれども、結局は対象を都市から周囲に広げるだけでは従来の都市史の域も出ないし、地域再編論の域も出ない。とてつもない専門家たちがいっぱいいて、文献史的なことできさらに新しいことを言うのもなかなか難しい。概念、枠組みを作ったうえで、もう一度都市を考える必要があると思います。

ここでキーワードとして挙げられるのは、メタマップはまさにマップだと思うんですが、軸というか全体性がなかなか見えてこないんですが、「重層性と関係性」は、きょうずっと出ていましたね。「レイヤー」も使われましたし、「一体性」とか、「象徴性」。福地さんの話では「ブランド化」という言葉がありましたし、「名所化」も一体性と象徴性の一つの産物です。この重層性、関係性、一体性、象徴性というものを、もう一度地域から都市、都市内部にも目を向けて考えていくと、単に都市周辺に広げた研究というふうには捉えずに、都市と建築が一つの環境の中で考える土壌を作るというスタンスが最も重要でしょう。逆にイタリアなんかですと、計画者がそういうシステムを持って計画するのですごく良いですけども、日本の場合はそうはいかないです。都市と建築を生態学のアナロジーとして見ていく姿勢が求められているんじゃないかなと思います。

**小島** 小島です。本日の配付資料にあるテリトリーオの概念に関する説明では、少しですが制度、ガバナンスにも言及されています。そこが私の専門ですが、おそらくテリトリーオに対して、制度やガバナンスは上部と下部の関係で向きあっているのではないかと思います。つまりテリトリーオの外にあるものをどのようにとらえるかという論点ですが、制度やガバナンスはテリトリーオによって形成され、逆にテリトリーオを規定していく。高村先生からの話に関連させると、テリトリーオを理解しない計画は間違った方向に導いてしまう。

ところで、門外漢からの直感を昨年も申し上げたかもしれないのですが、歴史研究にはすでに知のストックがあるので、その焼き直しというよりも再解釈や、新たな視角から、色々な専門分野の業績を統合し歴史を再構成するということになると思います。ただし、そこで終わりではなく、現代や未来にどうつなげるかという問題意識から歴史研究を超えようとする時に、テリトリーオの概念の強さがあるのではないかと思います。栗生さんから「市民」のお話が出ましたけれども、それは、過去・現在・未来をつなぐ概念であって、テリトリーオによって、そうした視座を得ることができるのではないのでしょうか。

本日の事例からも、長期的なタイムスパンにおいて、テリトリーオは形成され、あるいは変容していくということが理解できます。問題は、それを誰が仕掛けているのか、あるいは担っているのか。ヴェネツィアでは政府の権力によって政策的に推進しているのか、牛窓の場合は藩の政策なのか。学生の方がきれいに作られた地図が示すネットワークには商人の役割も大きいでしょう。

誰かがランドデザインを描くこともありえますが、テリトリーオは、数十年から数百年にわたり、様々な主体の相互作用による地域社会史の中で自己組織化されていくというところも大切であって、またテリトリーオは「全体性」「一体性」を強調した概念ですから、視角によって、生態系、共同体、産業、文化など、見え方が変わってくるのだと思います。いずれにしても、特にテリトリーオの形成期における自己組織性が重要ではないかと思います。

さらに、それが長いタイムスパンにおいて、そのまま継承されていくのか、それとも変容していくのか、あるいは破壊や再生があるのかという問いが出てきます。テリトリーオの変容や破壊をもたらした近代を否定的にとらえるのであれば、それではどこに戻ればいいのか、あるいはどこに向かえばいいのかということが、現代や未来の話として出てきます。そしてそのためにも、時間軸の中で、テリトリーオの形成、継承、変容、衰退、破壊、弛緩、分断、再編、再生、再構築などのダイナミズムをとらえる必要があるのではないかと思います。

ところで、近代はテリトリーオを破壊するものだと、先走ったことを言ってしまいましたが、石神先生の話を知ると、必ずしもそうではなくて、近世からあったテリトリーオをベースにしながら、近代は新たなテリトリーオを流域産業という形で再構築をしていく。近代化の論理と軌跡においてもテリトリーオが再構築されるのであれば、現代におけるテリトリーオの再構築というテーマが浮上してくるのであって、それは、デザイン論、計画論、政策論、実践論へと接続していくといえます。

最後に、私の専門から政府や行政の構造的問題を指摘しておきたいと思います。近代行政国家は、行政機能の分化、法体系の確立と法令用語への置き換えを通して、テリトリーオの全体性・一体性を個別の行政領域に分解したといえます。したがって、それらをどのように再統合していくのかという課題に、今の私たちは直面しているのでしょう。その政策主体は、自治体という地域の政府であるべきです。しかし、100年以上も続いた中央集権型システムから地方分権型システムに移行して20年が経ちましたが、テリトリーオの全体性・一体性について、総合行政でとらえる政策思考にまだ習熟していません。

そこで、テリトリーオに関する歴史研究の成果をいかに活用するのかという論点が出てきます。1つは、やはり歴史的価値をふまえた政策的価値の証明と提唱、もう1つは、そこから未来のデザインコードをつくるということです。「懐かしい未来」という言葉がありますが、それはデザインコードの総称といってもよいでしょう。歴史をふまえた現代における〈テリトリーオの政策概念化〉とそれに基づく構想は可能かどうかということ、自分の専門とのかかわりで考えてみたいと思います。なぜならば、それが地域の持続可能性やSDGsとも重なってくるからです。

**陣内** 今日、ある意味で、エコ研の十何年かの長い歴史がある中で、本当に重要なターニングポイントになっているな。方向性、漠然としたり曖昧なことはいっぱいある、矛盾もあるけれど、かなりいい形で、次の大きなパースペクティブを切り開いているんじゃないかと感銘を受けました。

EToS (法政大学江戸東京研究センター) が機能して、学際的に学内で展開し、江戸東京、新しい視点で見ると。それとも連動しつつ、しかしエコ研の独自性をもう一回確認し発展させる、そういう方向性でテリトリーオが浮上ってきて、皆さんかなり興味を持ってくださってスタートしたと思うんですね。江戸東京はEToSの中にも入っているけれど、エコ研ならではの新しい切り口、新しい展望をいろいろ出していただいたし、ある意味でそれと同じ思想だと思っています。全国いろんなところにくくり出せる、浮かび上がらせるテリトリーオのあり方を模索している成果を出していただいた。

そういう議論の中で科研の申請もやっていただいたということなんですけど、テリトリーオって、実は学問的にこうやって定義してます、とはイタリア人も言っていないんです。それぞれ思い思いにやってきていて、融通無碍なところがあります。だから僕はそういった定義にこだわるのは得策じゃないと思っています。イタリアでは歴史家もテリトリーオを自然に使う。子どもたちも、そして市民も、本当に日常の中で使う。自治体もNPOも、ローカルなアソシエーションも、ワインの生産者も、みんなテリトリーオという言葉で自然な形で生き生きと使っていて、自分たちの誇りとアイデンティティーを表現して、その次への戦略を都市とテリトリーオということ使っているんですね。だから、僕は定義やディシプリンにこだわるのはエコ研らしくないなと思っています。使えるところは使う、一緒にやれるところは一緒にやる。大きい枠組みでエコ研がものすごいことをやっているっていうことを、学術的にも社会的にも、それから市民の間でもアピールしていくのがいいんじゃないかと思います。

でもやはり整理しなきゃいけない。きょう出てきた中でもいろいろありましたよね。入れ子構造っていうこ

ともありました。大きいテリトリーオ、そしてその中を構成するサブディビジョンというか、構成している小さいテリトリーオ、それがまた大きいとこと小さいところが有機的に結び付いているという代表が、きょう樋渡さんが瀬戸内で示してくれたことですよ。小さいテリトリーオの一つとして、きょうは愛媛県の肱川、小田川っていうのが出てきて、そういうのに匹敵する、すごくわかりやすく魅力的な流域文化圏としてのテリトリーオを、天竜川で清水先生が示してくださった。さっき小島先生がおっしゃったように、近代が壊したと思うのか、近代が近世から、あるいはもっと前からの経験や地域の力、木材があったとかを使ってきたのか。

福地君の話でも、造船業が瀬戸内であんなに発展したのは近代ですよ。広い大きなスケールで資材、職人を集めて大産業に発展して、それが昭和の初期までであった。だから近代は否定の対象じゃなくて、もう一回われわれのテリトリーオの文脈で再評価することがものすごくいっぱいある。東京もそうですね。特に都市化がどんどんステップアップした東京とか大阪のような首都圏では、近代が作り出したテリトリーオっていうのは本当にいっぱいあるはずで、私鉄、電鉄会社がつくり出した郊外の発展や行楽地の開発も、ある意味では近代のプラスのテリトリーオだと思っています。

ですから、どこをクリティカルで批判的に壊したとか、駄目にしたかを見ていかなきゃいけないですが、多くの場合は近代化、産業化から取り残された過疎地、中山間部なんかでは近代が壊して骨抜きにして、弱体化したっていうところでクリティカルにその光を当てて、リソース、蓄積とか、人間の営みの重なりをもう一回浮かび上がらせる。だから近代をどう捉えるかは、大都市およびその周辺と、過疎化している中山間部では全然違うんじゃないかと思います。

福井先生がおっしゃった新しい提示、これも非常に面白いですよ。東京のテリトリーオで、武蔵野テリトリーオから関東テリトリーオ、そして江戸湾テリトリーオを、つなげて見ていくということですね。これも新しい考え方で、東京のような首都圏の広いところをひとくくりには絶対にできないので、どういうロジックでくり出すか。つまり共通性と同じような文化的アイデンティティーを、経済的つながりがあるようなところを、あるいは地政学的にどうやってくり出して、つなげて、ダイナミックに大きいテリトリーオを理解するかという問題提起だと思います。

川沿いはまだ分かりやすいんですけど、それ以外のところをどうやってくるかというところで、面白いなと思ったのは、高見先生の島根ですね。松江周辺は湖があり、川があり、浜というか海沿いも四十いくつが点在して、ネットワーク化しているアイデンティティーを強烈に持っている地域が、近いところでお互いに相互関係を持ちながら、一つのテリトリーオを構成したところじゃないかと思ひまして、なかなか面白いなと。

馬場先生がおっしゃった宗教的なものとか、神話性、神話や伝説とか、宗教つまり信仰。非常に重要で、特に日本のテリトリーオを考えるときには、これはキーワードになると。これはもちろん高村さんが東京でずっと聖地を扱って、全国の城下町でやっていることにも通ずるわけですが、馬場先生や根崎先生が描かれた、江戸東京というところでも、江戸という都市と、あるいは東京という都市と周辺が、非常に密接に結び付いている。それは経済や支配、そして下肥というようなものがありますけど、同時に名所っていうことをおっしゃって。名所はだいた宗教空間や神話と結び付いているわけで、田園農村部と都市がこんなに密接に結び付いた関係があるのは、江戸東京、日本の都市の大きな特徴で、欧米にはあまりないと思うんですね。中国や韓国はどうなのか、アジアの他の国と比較すると面白いでしょうね。

われわれは周辺の領域を新しく対象として広げているんじゃないで、都市との関係、都市の要素、文化の内実を見る目で、周辺との関係で見ようとしているわけですよ。それがまさに名所研究に代表される、ある意味で意識が都市の中心に向かうだけじゃなくて、むしろ遠心的に、外に向かっているっていうのが日本の都市の大きな特徴です。福井先生や米家先生がこの間に発表してきた中でもよく分かるわけで、名所研究のグループの人たちが分析考察しているように、歌川広重の『名所江戸百景』が、都市の近景を描くとき、必ず遠景として富士山や筑波山や周辺のものも描いています。そこに見られる都市の遠心構造は本当に大きな特徴で、最初からテリトリーオへのまなざしが都市の文化の中に入っているのではないかなと思います。テリトリーオの定義は非常に丁寧にやらなくてはいけないですけども、重層的で複合的なものになっているのではないかと

思います。

堀尾さんは社会人ドクターみたいな立場で入って、桐生の町を徹底的に水の都市と想定して研究してくれたんですけど、桐生は大きな川からはちょっと離れていて、水路で引っ張っている。用水路をいっぱい引いて、江戸時代の早い段階から農業用水としてあったのを、江戸の中期ぐらいから明治にかけてさらにリファインして強化して、産業の水のネットワークにして、織物工業、絹織物工業を発展させた。それが水車を回して燃糸工程をやっている、近代にはアメリカから学んで動力、水車タービンを導入して本格化した、水力工業都市の代表選手なんですね。そういう意味では、石神先生の天竜川と似ている。もう一つ日本の都市の中では、川だけじゃなくて用水路、神田上水、玉川上水を引いて、人工的に土地と水、人間の営みを絡めてテリトリーオを作る、システムを作っていくってことも一つの切り口になるかと思いました。

そういう感覚が一般市民の中にも入ってくれば、ルーラル・ツーリズムにつながるということが見えています。だから歴史が計画かなんていうふうにはわけないで、歴史からそこに貢献する、描かれた豊かな素材に基づいて、どんなプレゼンテーションをしたらかっこいい魅力的なテリトリーオが浮上するかということを考えて、理論化をするのが歴史家であり、計画の人がやってもいい、当然生態学、地質学、エコロジーの専門家も入らなくてはならない、経済の流通の専門家も、というように、学際的な非常に大きな共通のフィールドが広がるんじゃないかと思います。いずれにしても今日はすごく面白い素材がたくさん提示されて、整理していくとすごくいいテリトリーオ研究の方向性が、たくさん価値観を含みながらできるのではないかなと思います。

**岩佐** いま福井先生にキーワードを挙げていただきまして（次ページ図参照）、テリトリーオ研究会を継続的に進めていく中で、このキーワードをフィードバックしていきたいと思います。

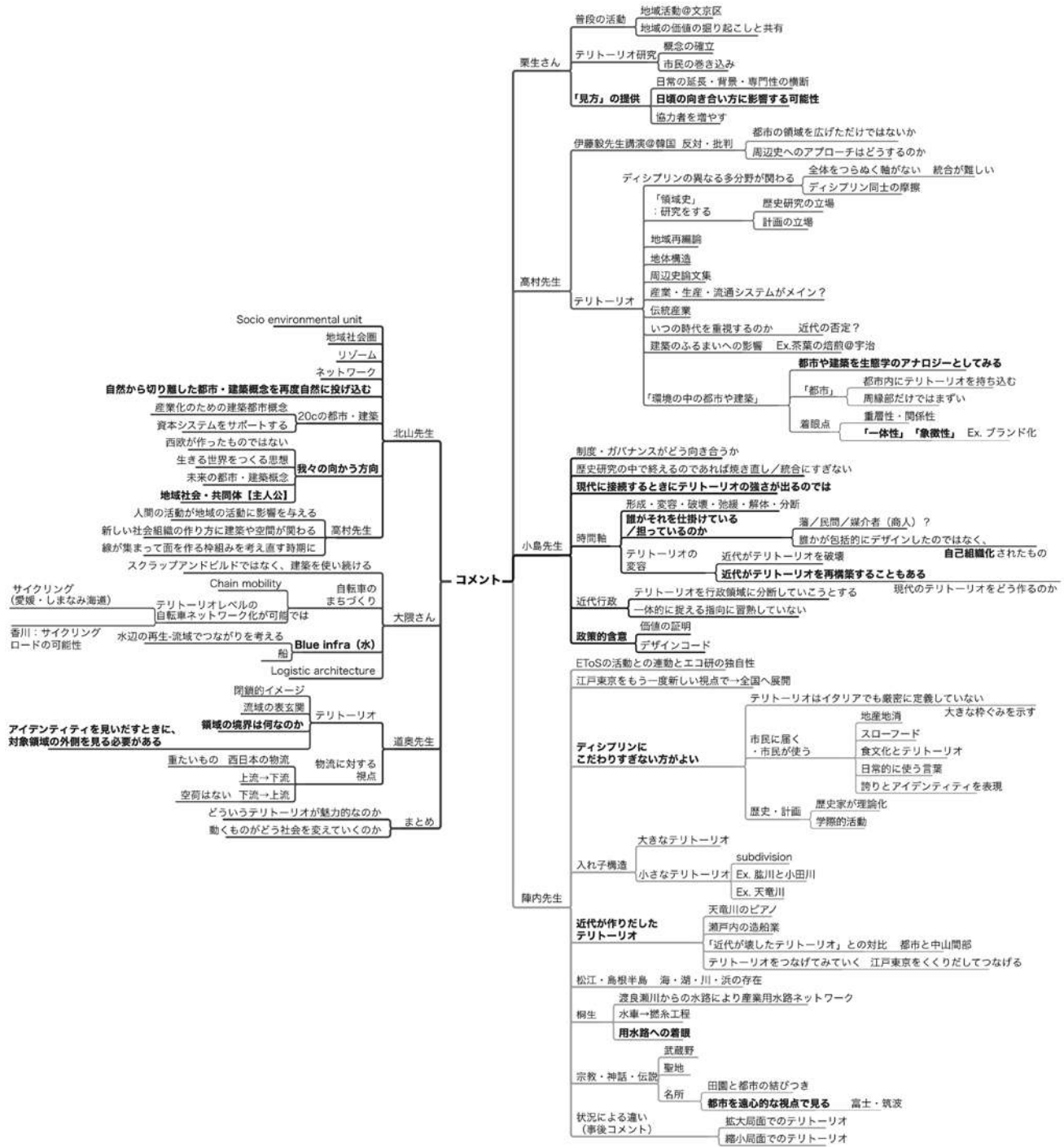
せっかくお越しいただいた方もたくさんいらっしゃると思いますので、気になったところなどと絡めつつご発言いただきたいと思います。たとえば、高村先生のほうから、都市や建築を生態学のひとつとして見ていく、建築や都市にきちんと軸足を置いて、テリトリーオを考えていくことが重要ではないかというご指摘だと思いますが、北山先生はまさにそういう観点から実践とつなげていらっしゃる部分も多いと思います。

**北山** テリトリーオは僕も陣内さんからこの話を伺って、すごく期待を持っているのに加えて、私自身も同じように、21世紀に入る頃から地域的なこと、20世紀の建築はフリースタANDINGオブジェとしての建築に特化されている概念だったのを、建築という概念がもう少し地域に拡散していくような状態のほうが未来的ではないかと思っています。

前の大学で *socio-environmental unit*、社会環境単位というものについて、文章を書いたり展開してきています。山本理顕さんと一緒に大学でこれを始めたとき、山本さんが、「地域社会圏」という言葉を作って、地域社会のための建築、または地域社会そのものを建築という概念で扱えないかっていう話をしていました。同じ大学にいた計画系の先生が、エコミュージアムの研究をやっている、「ミリヨー(millieu)」というフランスの地域社会にあてはまる概念の単語で話をされていました。概念を特定するために言葉は重要です。ドゥルーズはリゾームという概念を、21世紀に入ってくる頃からはブリュノ・ラトゥールがアクターネットワークという言葉を使っています。全てがネットワーク化されているというか、単体ではなく連携していく関係性を持ったものを研究対象にする。それを物的環境の研究対象にするというような方向に動いています。おそらく自然というものから切り離れた建築概念、または都市概念を、もう一度自然の中に投げ込むようなものです。高村さんが環境の中の建築都市というお話をされましたけれども、まさにもともと当たり前で、合一しているものを切り離していた。特に近代化の中で、産業のための都市や、産業化のための建築都市を中心にした、肥大化した建築・都市の概念、制度自体も、資本システムをサポートするような制度設計をされているような20世紀が、そのまま21世紀に引き継がれています。

われわれの実際生きている環境自体が変わってきているにもかかわらず、それ以前の社会システムを制度がキープしている。われわれの向かうべき社会は違う方向にあります。近代とは特に産業革命以降の西洋がリードした社会システムですが、効率を求め合理的に区分し社会を整理します。そうではない社会システムを作ろうと思ったとき、テリトリーオの概念が時間、空間のネットワークと広がりを塊のように捉える概念を持って

### 3 今後の活動に向けて A Vision for the Next



図：ディスカッションの重要キーワード

いること、それが、次の私たちの生きる世界をどうデザインするのかという点で大事な思想を作っていると思っています。

テリトリーオという概念を当たり前のように使い、地域社会についての話、それから共同体を語らなければならない。地域社会っていうのは、その中に人間という主人公がいる。建築とは人々のアクティビティを対象とし、生活と連続する社会そのものをデザインしているのです。

**高村** 最近の動きは、ソーシャル・エンゲージド・アートがまさにニューヨーク、パリから始まったこと。僕はそこだと思っています。人間の活動が地域の空間や物に対して、どうやって影響するか。例えば岐阜県の

木洗いという伝統行事があるんですけど、町を洗うんですよ、柱とか。いろいろ薬品使うので、かなり広いところから材料を持ってきていて、職人さんもそこから連れてくる。これも実はテリトリーオで、どう動いているのかは歴史的な違いもあるし、新しい社会組織の作られ方も変化する。そこに空間や建築やモノが関わって、ある程度のテリトリーを作って、テリトリーとかシステム構造を作ることが出てきているんですよ。

だから、テリトリーオが入れ子というのはまさにそうで、周辺だけじゃなく都市内部にもいろんな入れ子があって、ガーンと広がっていくときも、広がらないときもある。点としての見方ではなく、線が繋がって、面をどうやって捉え直すか。これについて、いまだに我々、都市計画も建築も研究が抜けているんです。歴史学も最近やり出した。新しい土壌、枠組みの中で、自分たちのディシプリンを改めて考え直す時期に来ていると思います。

**岩佐** どうもありがとうございました。きょうちょうどロジスティック・アーキテクチャということで、ずっと流通という概念から幾つか研究会を主催されて議論されている大隈さんがお越しになっていますので、テリトリーオやこの議論の流れについて、きょう一通りご覧になられた感想を含めてコメントをいただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

**大隈** 大隈でございます。久しぶりに来ましたが、新しい展開、非常に期待しています。私はもともと実務設計や都市計画の実務学者なので、研究者ではないのですが、今までの経験の中で考えてみました。経営にしても、きょう福井先生がお話しになった視点とか、相関といったいろんな視点でやってきていますので、元には同じようなことがあるなと感じております。建築をスクラップアンドビルドではなく使い続けるとか、都市計画では自転車のまちづくりをやっておりまして、チェーンモビリティ、つながりが必要ということが一番ポイントになると考えています。神田川サミットとか、ミズベリングにも参加しているんですが、ある流域で考える、つながりを常に考えるということでは同じで、また参加したいなと思っています。

先ほどお話に出ました、ロジスティクス・アーキテクチャ研究会は、ロジスティクスと物流と建築の人たちが交流して、今までなかった視点が見つかるんじゃないかと研究会をしています。きょう、グリーンインフラという言葉が出ました。私たちは「ブルーインフラ」という言葉を作って、水を介していろんな世界がつながる、船による貿易から始まって地球規模までを今考えています。こうしたこともつながってくるなと思いました。また参加したいと思います。ありがとうございました。

**陣内** 大隈さんは昔からサイクリング、自転車をやってらっしゃいます。愛媛で内子に行ったときに、あの辺りもサイクリングのルートでテリトリーオを結ぼうとしている。しまなみ海道もそうです。尾道の港のところに、上屋を再利用したかっこいいサイクリングの人たちの拠点ができています。桐生担当の堀尾さんが来られなかったのは、コンサルタントの仕事で香川県に行ってサイクリングロードの可能性を追求するプロジェクトで出張しているんじゃないかなと思うんです。自転車の利用は都市内でも検討されて成果を上げているけど、テリトリーオレベルの自転車のネットワーク化は、非常に重要で、可能性があるんじゃないかなと思います。

**岩佐** どうもありがとうございました。ぜひ引き続き、いろいろ情報交換していければと思います。まだご発言されてない道奥先生、いかがですか。

**道奥** テリトリーオというと閉鎖的なイメージ、ニュアンスがありますね。ある枠組みを想定して、何かの共通性を見いだそうとするとき、アイデンティティーを見いだすには、対象領域の外側を見なければと思うんです。例えば、今日、話題提供いただいたテリトリーオは、流域に重なる部分があり、その場合の表玄関は海側で、きょうも瀬戸内海のお話がありました。

例えば物流1つ考えても、西日本と東日本で全然、内容が違うわけです。西日本は重たい荷物が租庸調の税制時代に物納することで、これは徳仁親王（現天皇）の著書からの受け売りでございますけれど、物流について、テリトリーオの外側、境界がどうなっているかということを考えないといけない。特に日本の場合、物流は上流から下流、下流から上流にまた船を持って行く。馬車で引いて苦労して上げるわけですから、空荷のまま上がるはずはなくて、必ず海産物などの荷物の双方向の交流があり、直流ではない。いかだの場合は直流ですけれど、そういうことを考える場合、テリトリーオの境界条件が何なのか。例えば、表玄関、庭先は海であ

### 3 今後の活動に向けて A Vision for the Next

るかどうか。西日本と東日本で大きな違いがあるということからも、領域を考えるとこそ外側も考えてみたいと、きょうの話題提供をいただいて考えた次第です。

**岩佐** どうもありがとうございました。この時系列でまとめてくださったディスカッションを、ぜひこれからも、きょうの議論がこぼれないよう共有していきたいと思います。陣内先生もおっしゃったように、テリトリーオの概念をどうするか議論も重要だけれども、こだわり過ぎるのもいかなものかと。しばらく、そういうことに対してみんながイメージするものをそれぞれ持ちながら広げていくのはどうかというお話があって、まさにそういう部分はあるかもしれません。

僕がすごく面白いなと思ったのが、いろいろ見ていく視点としてのテリトリーオは重要なんだけど、魅力的なテリトリーオがどうやったら浮上するか。どういうテリトリーオが魅力的かという問いは非常に重要で、ぜひたくさん学生と一緒にいろいろ研究していく中で、いかにクリアな本質性を受け継いでいけるかということ、1年間の宿題にしていきたいと思います。思えば、1年前に比べてかなり議論がスパイラルアップした印象があります。この研究会が、来年度同じように議論していく中で続けていけるかと思っています。

きょうはコロナウイルスが流行しているということで、本当に命懸けの議論だった、でもその甲斐がありました。

これでエコ研の年度末報告は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。



## **4 研究業績**

### **Research Achievements**

研究業績

(2020年1月以降の研究業績)

刊行書籍



【1】

【ETO S 叢書 2】風土(Fudo)から江戸東京へ  
安孫子信 (監修)、法政大学出版局、2020年3月 【1】

序---なぜ風土(Fudo)なのか (安孫子信)

【第一部 和辻『風土』における東京】

「風土」から見た都市「東京」の珍しさ (星野勉) / 和辻風土学で解く江戸東京の特質---皇居・武家屋敷・宗教空間 (田中久文) / 和辻哲郎の「江戸城」発見---「城」(1935)における濠と高層建築の対比 (橋本順光) / 和辻哲郎にとつての東京---田舎あるいは古代という対立軸から (衣笠正晃)

【第二部 風土から Fudo へ、ベルクの視点をめぐって】

<脱中心化>と<再中心化>---風土学の本質的契機 (木岡伸夫) / 都会の蜃---和辻哲郎とオギュスタン・ベルクとともに都市の風土を考える (ジャン=フィリップ・ピエロン/犬塚悠訳) / 不可能のバリとしての東京---「都市の風景」批判 (チエリー・オケ/松井久訳) / 風土と雰囲気---都市のための二つの概念 (エリー・デューリング/石渡崇文訳)

【第三部 風土と江戸東京】

荒野と名前のない海と---江戸東京の原意味 (河野哲也) / 文化的景観と風土、その担い手 (福井恒明) / 水性の東京---映画に対する風土学の試み (クレリア・ゼルニック/岡村民夫訳) / イノヴェーションに直面する風土---戦後日本の都市の近代化をめぐる言説に見る風土の消失についての考察 (アンドレア・フロレス・ウルシマ/松井久訳)

総括---風土(Fudo)と「珍しさ」の諸相 (陣内秀信)

著書



【2】

陣内秀信「ヴェネト州の都市と地域の空間構造—地形と河川からの視点を中心として」『イタリアの中世都市—アゾロの都市から領域まで』(伊藤毅編) 所収

鹿島出版会、2020年4月 【2】



【3】

朴賛弼『日本の風土と景観-西地方編』韓国版  
技文堂、2020年4月25日 【3】



【4】

島原中心市街地街づくり推進協議会『島原よろずまち湧水散策』  
(図面、資料、文章提供：高村雅彦)  
島原中心市街地街づくり推進協議会、2020年5月

栗生はるか、金谷匡高、他 (共著) 旧渡辺甚吉邸サポーターズ監修  
『奇跡の住宅 旧渡辺甚吉邸と室内装飾』  
LIXIL 出版、2020年6月 【4】



【5】

朴賛弼 (分担執筆) 『民家を知る旅』  
日本民俗建築学会編  
彰国社、2020年6月10日 【5】



【6】

朴賛弼、伏見建著 『基礎講座 建築環境工学』  
学芸出版社、2020年7月31日 【6】



【7】

陣内秀信 『水都東京—地形と歴史から読みとく下町・山の手・郊外』  
筑摩書房、2020年10月 【7】



【8】

木村純子  
「特定農林水産物等の名称の保護に関する法律(地理的表示(GI)法)」  
『世界の食文化百科事典』所収  
丸善出版、2021年1月 【8】



【9】

朴賛弼 『日本の風土と景観-東地方編-』  
技文堂、2021年2月1日 【9】

報告書



【10】

【EToS 報告書 6】テクノロジーと東京

山本真鳥 編、江戸東京研究センター、2020年3月 【10】

- I 交通「交通体系の変化と東京の都市構造の変容」陣内秀信 / 「効率の最大化によって変質する都市空間」岩佐明彦 / 「近代東京の社寺参詣と電鉄」鈴木勇一郎
- II 建築「やわらかい都市のテクノロジー」北山恒 / 「失われた場所、失われた時間」高村雅彦 / 「まちに眠るテクノロジーの記憶を探る」岩井桃子
- III テクノロジー「人間とテクノロジーのインタラクションをデザインする：シリコンバレーと東京」白石さや / 「江戸時代の科学技術と現代のロボット」石井千春 / 「テクノロジーとしての文学言語」田中和生



【11】

シンポジウム「地域から外濠の再生を考える」報告書

外濠再生懇談会，法政大学江戸東京研究センター，法政大学エコ地域デザイン研究センター，東京理科大学外濠及び神楽坂地域調査研究推進室、2020年3月 【11】

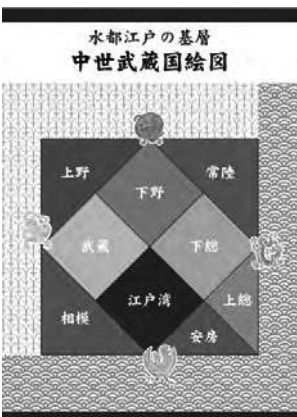
- 【巻頭特集】 外濠 vision2036 パンフレット / シンポジウムフライヤー / 会場写真
- 【趣旨説明】 陣内秀信（法政大学特任教授・外濠再生懇談会代表）
- 【基調講演】「外濠文化の可能性」田中優子（法政大学総長）
- 【基調講演】「グローバル都市東京における外濠・神楽坂」松本洋一郎（東京理科大学学長）
- 【外濠再生憲章について】 福井恒明（法政大学教授・外濠再生懇談会事務局）
- 【パネルディスカッション】
- 【閉会挨拶】 宇野求（東京理科大学教授・外濠再生懇談会代表）
- 【シンポジウム参加者アンケート】 / 【実施概要】
- 【付録】 都知事への提言実施と東京都「未来の東京」戦略ビジョンへの反映 / 外濠・日本橋川の水質浄化と玉川上水・分水網の保全再生について（提言） / 東京都「未来の東京」戦略ビジョン抜粋



【12】

【EToS 報告書】東京発掘プロジェクト 水辺編 II

高村雅彦 皆川典久 監修、江戸東京研究センター、2020年4月 【12】



【13】

【EToS 制作物】水都江戸の基層・中世武蔵国絵図

江戸東京研究センター「水都ー基層構造」プロジェクトチーム 神谷博、江戸東京研究センター、2020年7月 【13】

「水都ー基層構造」プロジェクトにおいて江戸基層研究の一角を担う「府中玉川プロジェクト」の成果物。中世の武蔵国の河川水系や地形を著した地図。

## 論文

- 根崎光男「江戸町方における火の見櫓の建設と御鷹御用一牛込揚場町を事例として」人間環境論集(法政大学人間環境学会) 第20巻第2号、2020年3月23日
- 小島聡「上下流連携とサステナビリティ」『自治体学』vol.33-2 自治体学会、2020年3月
- 馬場憲一「近世都市周辺の宗教施設の由緒と『名所』化の動向—江戸近郊の『井の頭弁財天社』と『井の頭池』を事例として—」法政大学『多摩論集』第36号 pp.137-157、2020年3月
- 馬場憲一「文化財保護領域における行政と市民との協働の実態と課題—『市民的公共圏』実現の視点から—」(法政大学『現代福祉研究』第20号 pp.1-19、2020年3月)
- 小島聡「人口減少社会における地域の持続可能性と政策論—〈私〉と〈社会〉の世代間継承可能性を手がかりとして」『自治研かながわ月報』No.183 公益社団法人 神奈川地方自治研究センター、2020年4月
- 川久保俊「持続可能な開発目標を活かした建築・都市分野の取組み (特集 あらためて「SDGs」を考える)」Re : Building maintenance & management 41(4), 10-15, 2020年4月
- 朴賛弼「夏におけるアクアレイヤーによる冷房効果の研究」『民俗建築』第157号、日本民俗建築学会46号、2020年5月
- 金田正夫・出口清孝「置屋根が冬の室内環境に与える影響について」『民俗建築』第157号、日本民俗建築学会46号、2020年5月
- 高見公雄「街づくり、景観と都市デザイン」新都市 (令和2年6月号)、2020年6月
- 富安亮輔, 岩佐明彦「分散型仮設団地と被災者の継続居住—熊本県嘉島町をケーススタディとして」日本建築学会技術報告集 第63号、2020年6月
- 北山恒「横浜都市デザイン概観」都市美 第2巻、2020年6月
- 栗生はるか「文京建築会ユースの取組み」建築士 Vol.69, No. 814、2020年7月
- 北山恒「戦後住宅クロニクル」建築ジャーナル No.1306、2020年7月
- 陣内秀信「東京2020の「いままで」と「これから」のまちづくり」『建築士』Vol.69, No. 814、2020年7月
- 木村純子「酪農とSDGsとの関わりによる豊かな社会の実現」『日本草地学会誌特集号』第66巻第2号, 111-115. 2020年7月
- 根崎光男「徳川御殿の時期区分試論—将軍の鷹狩りを中心に—」人間環境論集(法政大学人間環境学会) 21(1)、2020年10月31日
- 朴賛弼「韓国伝統集落の空間構成の要素」『民俗建築』第158号、日本民俗建築学会、2020年11月
- 木村純子「テリトリー・アプローチによる農村の内発的発展: トスカーナ州アミアータ・テリトリーオの事例 (特集 イタリアに学ぶ、豊かさ)『都市計画学会誌』347号、2020年11月15日
- 増田政弘、福井恒明「明治以降の近代化に伴う公共空間の変遷—上野公園に関する新聞記事の考察—」景観・デザイン研究講演集16、2020年12月
- 阿部遼磨、福井恒明「水害リスク地域における市街地の展開過程とその要因」景観・デザイン研究講演集16、2020年12月
- 藤田景、福井恒明「千代田区を対象とした古写真のアーカイブ化」景観・デザイン研究講演集16、2020年12月

#### 4 研究業績 Research Achievements

増淵実希、荻原知子、福井恒明「『婦人之友』誌にみる住まい方と価値観の変遷」景観・デザイン研究  
講演集 16、2020 年 12 月

堀越義人、福井恒明「川と地域が一体となったまちづくり推進における かわまちづくり支援制度の寄  
与」第 62 回土木計画学研究・講演集 (CD-ROM) 62、2020 年

福井恒明「観光考古学への期待」観光と考古学、2020 年

川久保俊「建築産業にとっての SDGs (特集 SDGs と住宅産業)」ALIA news : 快適な住空間をめざし  
て (167), 9-14, 2020 年

川久保俊「ローカル SDGs の策定と推進に関する現状と課題 (特集 SDGs と都市緑化)」都市緑化技術  
(111), 2-6, 2020 年

川久保俊「工務店にとっての SDGs (特集 エコから温暖化に…そして今は SDGs) -- (SDGs 時代の家づ  
くり)」建築技術 (852), 116-119, 2021 年 1 月

南雄三、川久保俊「対談 SDGs がピンとこない (特集 エコから温暖化に…そして今は SDGs) -- (SDGs  
時代の家づくり)」建築技術 (852), 106-115, 2021 年 1 月

#### 論文 (査読付き)

高田秀之、吉田好邦、川久保俊、山口歩太「環境性能が集合住宅の販売価格及び中古取引価格に与える  
影響 CASBEE 横浜の評価結果を用いた実証分析」日本建築学会環境系論文集 (767), 89-95, 2020-  
01 日本建築学会、2020 年 1 月

長谷部 俊治「『対話』は事業参加の場—ダム建設事業に見る合意形成の条件—」『土木学会誌』 Vol. 105  
No. 3 p. 16-19、日本土木学会、2020 年 3 月

Hideobu JINNAI The locus of my study of Tokyo: From building typology to spatial  
anthropology and eco-history. Japan Architectural Review—International Journal of Japan  
Architectural Review for Engineering and Design Volume3, Issue3 Jul. 2020

道奥康治, 石積み堰の透過・伏没・越流解析と流況分類, 土木学会論文集 B1 (水工学), Vol.76, No.1,  
76.1\_10, pp.10-29, 2020.

Okamoto, Y., Nishio, J., Kanda, K., Michioku, K., Nakamura, F. and Kubo, H., Study on Riverbed  
Variation Management by groin at a River Confluence Associated with the Barrage Water, Proc.  
RIVER FLOW 2020, pp.1-10, 2020.

#### 学会発表

朴賛弼「韓国伝統集落の空間構成の要素」日本民俗建築学会 47 回大会、江戸東京博物館、2020 年 7  
月 12 日

邵 帥・高村 雅彦「広州における建国前後の都市計画と住宅地の変遷—東アジア都市の近現代におけ  
る住宅地形成と集合住宅に関する研究 その 5」日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東) オンライ  
ン 発表、2020 年 9 月

木村純子「イタリア農業の底力：アミアータのテリトリー」法政大学イノベーション・マネジメント  
研究センター主催シンポジウム『エノガストロノミアとテリトリー：日本とイタリアの農業文化  
の発展』2020 年 10 月 10 日開催

招待講演、国際学会

栗生はるか「文京建築会ユースの取り組み」日本建築士会連合会 第28回まちづくり会議、笹川記念会館、2020年1月

Haruka KURIU, Maintenance and succession of “regional ecosystems”– examples of public bath, “sento” in Tokyo. in Tokyo and Venice as Cities on Water: Past Memories and Future Perspectives, at Ca' Foscari University of Venice, Jan. 2020

Hidenobu JINNAI, Process of Regeneration of Water City in Tokyo and its Future Vision. in Tokyo and Venice as Cities on Water: Past Memories and Future Perspectives, at Ca' Foscari University of Venice, Jan. 2020

Masahiko TAKAMURA, Appropriate Range of the City in Edo-Tokyo provided by the Historical Sacred Place of the Water. in Tokyo and Venice as Cities on Water: Past Memories and Future Perspectives, at Ca' Foscari University of Venice, Jan. 2020

Makoto WATANABE, Yoko KINOSHITA, The Beginning, and the Present Condition of Collective Housing in Tokyo: Center-Periphery, Inland-Waterfront. in Tokyo and Venice as Cities on Water: Past Memories and Future Perspectives, at Ca' Foscari University of Venice, Jan. 2020

Tsuneaki FUKUI, Attempt of conservation and restoration of cultural landscape in Tokyo - Case of Edo castle outer moats and Katsushika-Shibamata temple town, Tokyo and Venice as Cities on Water: Past Memories and Future Perspectives, Ca' Foscari University of Venice, Jan. 2020

根崎光男「将軍の鷹狩と御殿」江戸遺跡研究会第32回大会・徳川御殿の考古学、駒沢大学駒沢キャンパス2号館、2020年2月

陣内秀信「水都東京—〈水〉から読みとく都市・自然・人間のむすびつき」第三回東アジア都市史学会学術大会、2020年10月

陣内秀信「東京に秘められた水都としての可能性」江戸東京歴史文化ルネッサンス設立3周年記念シンポジウム、2020年10月

根崎光男「徳川将軍の鷹狩りと鷹場」第3回東アジア都市史学会学術大会、法政大学（Zoom開催）2020年10月

BAO Muping, TAKAMURA Masahiko, The Mediator of "immigration citizens": A study on the history of Asian modern cities and architecture from the viewpoint of the Resident-style immigration. The 3rd international conference of the East-Asian Society for Urban History (Online), 17 October 2020

Hidenobu Jinnai, "Riqualficazione e rivitalizzazione dei centri storici e territori storici negli anni recenti in Giappone", Convegno internazionale di ANCSA (イタリア/全国歴史芸術都市保存協会の創立60周年記念大会), Italy/ Gubbio (オンライン)、2020年12月

Hidenobu Jinnai, “I ventennali risultati di un progetto di ricerca :dal centro storico di Amalfi alla Costiera Amalfitana”, Convegno di studi:Le ‘Città dell’acqua’ sulle Coste d’Amalfi e Venezia. Valori, immagine, progetto, Amalfi, 2020.12

道奥康治「気候変動下の総合治水と持続可能社会」武庫川の総合的な治水対策シンポジウム、基調講演・パネルディスカッション、2020年

### 著書に対して書かれた書評

- 松原隆一郎、毎日新聞、2020年11月14日 陣内秀信著『水都東京―地形と歴史で読み解く下町・山の手・郊外』(筑摩書房、2020)
- 橋爪紳也、日本経済新聞、2020年11月28日 陣内秀信著『水都東京―地形と歴史で読み解く下町・山の手・郊外』(筑摩書房、2020)
- 佐藤信、読売新聞、2020年12月6日 陣内秀信著『水都東京―地形と歴史で読み解く下町・山の手・郊外』(筑摩書房、2020)

### その他

- 陣内秀信「追悼 芳賀徹：「徳川時代」と都市・東京に注いだ国際的で開かれた視線」『東京人』pp.18-22、2020年5月
- 朴賛弼「写真資料の寄贈」会員活動『民俗建築』第157号、日本民俗建築学会、2020年5月
- 朴賛弼「西表島の古民家」One Shot Minka『民俗建築』第157号、日本民俗建築学会、2020年5月
- 朴賛弼、公益社団法人中央日韓協会功労感謝状授与、2020年5月
- 陣内秀信「未来に向けた新たな住まい方」『建築東京』Vol.56, No.668, p.14、2020年6月
- 北山恒(設計)「中央ラインハウス小金井」、『新建築』、pp65-75、2020年8月
- 北山恒(設計)「中央ラインハウス小金井」、『日経アーキテクチュア』2020年7月、pp66-72
- 金谷匡高他(出演)NHK「おはよう日本」(TV)、2020年9月8日：特集「台風15号から1年 島の文化を守りたい」新島の歴史的な建物群や景観をどのように残し後世に伝えていくかという話を学生達と語る
- 金谷匡高他(出演)NHK「ちかさとナビ」ウェブサイト、2020年9月8日：「台風15号(2019年)被害の新島 石造りの街並みを修復」(放送内容のテキスト版)  
<https://www.nhk.or.jp/shutoken/ohayo/20200908.html>
- 高村雅彦「都市の歴史と保存活用の考え方―日本とアジアを例に―  
第1講 アジア都市の保存と活用を考える―動態と更新の歴史から  
第2講 都市の領域はどこまでか―災害から浮かび上がる日本の未来像  
飯田アカデミア(飯田市歴史研究所)オンライン、2020年10月
- 朴賛弼(同時通訳)「東アジア都市史学会のシンポジウム」Zoom開催、江戸東京研究所、2020年10月17日
- 北山恒「未来都市はムラに近似する」Webコラム「驟雨異論」vol2、2020年7月20日
- 北山恒「クリストファー・アレグザンダーの「人間都市」(a human city)を知っているか」Webコラム「驟雨異論」vol3、2020年10月20日
- 道奥康治「マルチ・ハザード時代を生き抜く―持続可能社会に向けて―」、広報誌「法政」2020年10月号

### メディア掲載

- 陣内秀信 他「鼎談 蘇る水都の記憶と武蔵野の杜」(特集「四谷」都心の大規模再開発 新時代の幕開け!)『東京人』2020年12月号

## **5 活動報告**

**Activity Report**

## 活動報告

(2020年1月～12月までの活動)

### ○ 「玉川源流物語」 YouTube 公開

【内容】「府中・玉川プロジェクト玉姫神楽づくり」の活動記録映像を公開

【動画】 <https://youtu.be/sgRzI-T3o5Y>



### ○ 2019 年度 法政大学エコ地域デザイン研究センター 年度末報告会

【日時】2020年2月25日(火) 13:00-17:30

【会場】法政大学市ヶ谷田町校舎 5F マルチメディアホール

【主催】法政大学エコ地域デザイン研究センター



### ○ 気候変動と雨水活用シンポジウム&セミナー 「ドイツ雨水規格から日本の雨水の基準と制度を考える」

【日時】2020年2月19日(水) 10:00～18:00

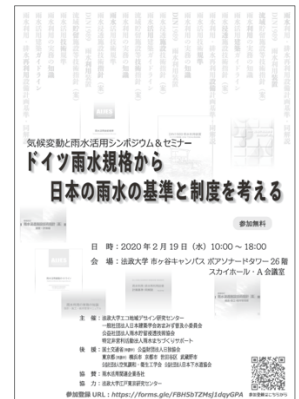
【会場】法政大学市ヶ谷キャンパスポアソナードタワー26階 スカイホール・A会議室

【主催】法政大学エコ地域デザイン研究センター、一般社団法人日本建築学会あまみず普及小委員会、公益社団法人雨水貯留浸透技術協会、特定非営利活動法人雨水まちづくりサポート

【プログラム】

第1部〔シンポジウム〕  
「雨水の基準と制度を考える」

第2部〔セミナー〕  
「日独雨水技術セミナー」



### ○ 佐原視察・佐原アカデミアとの研究交流会議

【日時】2020年3月1日(水)

【場所】千葉県香取市佐原

【内容】NPO 法人佐原アカデミアの招きにより、法政大学エコ地域デザイン研究センターと法政大学江戸東京研究センターの研究員が佐原を訪問し、現地視察と今後の研究協力についての打ち合わせを行った。



### ○ 第2回 テリトリーオ研究会 「～イタリア農業の底力～」

【日時】2020年9月16日(水) 15:00～17:00

【会場】ZOOM によるリモート開催

【主催】法政大学エコ地域デザイン研究センター、法政大学江戸東京研究センター(水都一基層構造プロジェクト)

【プログラム】

「テリトリー戦略による価値創出：アミアータ西麓の事例を手がかりに」

話題提供：木村純子（法政大学経営学部）

コメント：陣内秀信（法政大学特任教授）

ディスカッション進行：福井恒明（法政大学教授）

【内容】イタリアの農業経営や農業政策に関する話題提供をもとに日本への適用可能性についてディスカッションを行った。



○ 神谷博法政大学退任記念  
「環境生態学」特別講義

【日時】2020年11月11日（水）18:30～20:30

【会場】千代田区立日比谷図書文化館 日比谷コンベンションホール（大ホール）

【主催】法政大学エコ地域デザイン研究センター

【共催】法政大学江戸東京研究センター、法政大学工学部建築学科



【動画】[https://youtu.be/DCnafNV\\_9Vk](https://youtu.be/DCnafNV_9Vk)  
(2021年3月現在)

【プログラム】

挨拶：陣内秀信（法政大学特任教授）

特別講義：「サバイバルエコロジー」神谷博（法政大学エコ地域研究センター客員研究員）

ゲスト対談：「人新世を見据えて」糸長浩司（日本大学特任教授）

○ 第11回 外濠市民塾

「外濠 BAR」おぼんカウンター作成

【日時】2020年11月29日（日）13:00～17:00

【会場】Lowp（ロウプ）地下1階  
（新宿区市谷左内町52）＋外濠公園周辺

【主催】外濠市民塾実行委員会

【プログラム】

1. 挨拶・趣旨説明
2. おぼんカウンターペイント
3. フィールドワーク
4. フィールドワーク報告



法政大学エコ地域デザイン研究センター メンバー

(2021年1月現在)

センター長

岩佐 明彦 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授

【兼任研究員】

出口 清孝 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授  
北山 恒 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授  
高村 雅彦 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授  
網野 禎昭 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教授  
川久保 俊 法政大学デザイン工学部建築学科 / 准教授  
朴 賛弼 法政大学デザイン工学部建築学科 / 助手  
道奥 康治 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授  
高見 公雄 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授  
福井 恒明 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授  
鈴木 善晴 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授  
今井 龍一 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科 / 教授  
長谷部 俊治 法政大学社会学部 / 教授  
根崎 光男 法政大学人間環境学部 / 教授  
小島 聡 法政大学人間環境学部 / 教授  
木村 純子 法政大学経営学部 / 教授  
金谷 匡高 法政大学デザイン工学部建築学科 / 教務助手

【特任研究員】

陣内 秀信 法政大学 / 特任教授

【客員研究員】

石神 隆 法政大学 / 名誉教授  
高橋 賢一 法政大学 / 名誉教授  
西谷 隆亘 法政大学 / 名誉教授  
永井 進 法政大学 / 名誉教授  
森田 喬 法政大学 / 名誉教授  
馬場 憲一 法政大学 / 名誉教授  
宮下 清栄 前 法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科  
岡本 哲志 岡本哲志都市建築研究所 / 代表  
浅井 義泰 (株)エキープ・エスパス / 取締役  
阿部 彰 一般社団法人 まちふねみらい塾 / 専務理事  
猪野 忍 (有)猪野建築設計 / 代表取締役  
大隈 哲 建築家・(株)イーソーコ総合研究所 / 特任研究員  
神谷 博 アトリエ水系デザイン主宰  
小松 妙子 マヌ都市建築研究所

酒井 哲	TownFactory 一級建築士事務所 / 代表
佐々木 政雄	(株)アトリエ74 建築都市計画研究所 / 代表取締役
清水 淳	北川かつぱの会代表
菅原 圭子	大成建設(株)
鈴木 知之	写真家
高松 巖	一般社団法人 まちふねみらい塾代表理事
鳥越 けい子	青山学院大学総合文化政策学部 / 教授
難波 匡甫	Lueur 場所と空間の研究所 / 所長
堀川 洋子	筑波大学生命環境系 / 研究員
水田 恒樹	社会福祉法人 小茂根の郷 / 監事
横内 憲久	日本大学理工学部まちづくり工学科 / 教授
恩田 重直	エコ地域デザイン研究センター / 兼任研究員
長野 浩子	株式会社 UR リンテージ九州支社
石渡 雄士	国立研究開発法人 建築研究所 戦略的研究推進室 / 専門研究員
稲益 祐太	久留米工業大学工学部建築設備工学科 / 特任講師 ・法政大学デザイン工学部 / 兼任講師
樋渡 彩	近畿大学工学部建築学科 / 講師
高道 昌志	東京都立大学都市環境学部都市政策科学科 / 助教
ディエゴ・コサ・フェルナンデス	一般社団法人キタ・マネジメント・建築文化研究所 / 所長
森屋 雅幸	江戸川区教育委員会 / 学芸員
栗生 はるか	せんとうとまち / 共同代表
金子 俊之	株式会社福山コンサルタント

## 【客員研究員（海外）】

神田 駿	マサチューセッツ工科大学建築+都市計画学科 / 教授
阮 儀三	同済大学国家歴史文化名城研究センター / 所長
Richard Bender	カリフォルニア大学バークレー校 / 名誉教授
Rinio Bruttomesso	ヴェネツィア水都国際研究センター / 元所長
Donatella Calabi	ヴェネツィア建築大学建築史学科 / 名誉教授
Paola Falini	ローマ大学建築学部都市計画学科 / 教授
Giuseppe Gargano	アマルフィ歴史文化研究所 / 歴史家
Ekhart Hahn	ドルトムント工科大学 / 名誉教授
Milan Konecny	マサリク大学地理情報学科 / 教授
Matteo Dario Paolucci	ヴェネツィア建築大学 / 講師
Suwattana Thadaniti	チュラロンコン大学・社会科学研究所 / アドバイザー・准教授
Paul Waley	リーズ大学環境学部地理学科 / 教授
Roderick Wilson	イリノイ大学 / 助教授

## 【事務局】

津久井 文	法政大学エコ地域デザイン研究センター / 研究補助員
-------	----------------------------

## 法政大学エコ地域デザイン研究センター

本研究センターの目的は、「環境の時代」を切り開く真の「都市と地域の再生」のための方法を研究することを目的とし、2004年4月にエコ地域デザイン研究所が設立、2016年4月にエコ地域デザイン研究センターと改名しました。とくに、長い歴史のなかで豊かな環境を育みながら、近代化の中でないがしろにされてきた地域資源を再生し、21世紀の都市・地域づくりの大きな柱にすることを目指しています。環境のバランスと文化的アイデンティティを失った日本の都市や地域を持続可能で個性豊かに蘇らせるために、〈エコロジー〉と〈歴史〉を結びつける独自のアプローチをとるところに大きな特徴があります。

国内外の専門家とネットワークを形成し、多角的な理念と手法を探求することにより問題解決に取り組んでいます。他の国や地域と比較しながら都市とテリトリーオ（地域）の水辺空間や自然環境を歴史的な視点を取り入れつつ深く研究し、その再生の具体的な方法を積極的に提言していきます。

## 法政大学エコ地域デザイン研究センター

### 2020年度報告書

発行日 2021年3月30日  
発行 法政大学エコ地域デザイン研究センター  
〒102-8160  
東京都千代田区富士見 2-17-1（市ヶ谷キャンパス）  
新見附校舎1階 研究開発センター内  
<http://eco-history.ws.hosei.ac.jp/wp/>  
編集 津久井 文（法政大学）  
印刷 藤原印刷（株）  
協賛 総合資格学院